
ファド ミラージュ・レーン

白銀

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ファド ミラージュ・レーン

【コード】

N9303D

【作者名】

白銀

【あらすじ】

一人の青年が『世界』を『追放』された。だが、青年にその『世界』への未練は無く、新しい『世界』へ、見知らぬ場所へ、彼は足を踏み出していく。これからの生活に、期待を抱きながら。

プロローグ 「追憶よ、さらば」

プロローグ 「追憶よ、さらば」

くすんだ黄金色の空と、褪せた銀色の草原の狭間に円が描かれていた。

二人の男が円の端に立ち、手には球形の結晶を掲げている。結晶の内部には光が渦を巻き、絶えず流動し続けていた。掲げられた二つの結晶を直径とするように、空間に円が描き出されていく。

「異相同期、開始」

二人の男は互いに視線を交わし、頷き合って呟いた。

「接続」

二人の声が重なり、円形に歪みを生じた空間が内側に呑み込まれていく。渦を巻いて内側へと流れ込む空間の後に残るのは、闇色の穴だ。

闇色の穴、ゲートの前にレーン・シュライヴは立っていた。

背後には視線を感じる。数人の騎士達がレーンを監視していた。

心地の良い視線ではない。心底からレーンを見下した、侮蔑の視線だ。

数日前までは正反対の視線を向けていた者達が、掌を返したように今はレーンを敵視している。

レーンは小さく鼻で笑った。

「接続完了」

二人が始めてレーンに視線を向けた。

早く行け、とでも言わんばかりに。

「これで、ここもおさらばか」

わざとらしく呟いて見せるが、周りの反応はない。レーンは苦笑して、足を進めた。

あと一步というところで、レーンは足を止める。目の前のゲートから視線を背け、背後を振り返る。

今まで自分が過ごして来た世界を目に焼き付けるために。

二度とここに帰って来ることはないだろうから。

空と大地の色彩を目に焼き付ける。レーンが幼い頃には、もつと世界は美しいものだった。色褪せた空と大地の向こうに、都市が見えた。城壁で囲まれた都に視線を向け、少しだけ目を細める。

良い思い出がないわけではない。楽しいことも沢山あった。

だが、もうあの場所へは戻れない。

レーンは息をついて、視線を闇へと向ける。

そして、一步を踏み出した。

レーンの身体が全て闇の中に飲み込まれると同時に、意識が消失する。だが、意識の途絶はほんの一瞬で、直ぐに視界が戻って来る。闇の中へと踏み出した足が地面に着いた時、目に映った景色はレーンの世界のものではなかった。

澄み渡った青い空が視界一杯に広がり、爽やかな風と共に草木がさらさらと心地の良い音を立てる。

場所は山の上らしく、街を見下ろす形になっていた。山から見下ろす街はレーンの世界と比べると雑多な印象がある。道路はあらゆる場所に張り巡らされ、道と道の間空間に家が所狭しと並んでいる。

窮屈そうではあったが、どこか開放的にも見えた。

背後にはもうゲートはない。レーンの通過と共にゲートは閉ざされていた。

風に交じる草木の香りを胸一杯に吸い込み、レーンは歩き出す。

こちらへ来てから一度も背後を振り返ることなく、レーンは一步を踏み出していた。

第一章 「銭湯の青年」

第一章 「銭湯の青年」

日が昇って間もない早朝に、小波漣さざなみれんは一人で黙々と掃除をしていた。銭湯の浴場の床をデッキブラシで丹念に擦り、壁を磨き、備え付けの台や桶の汚れもチェックしていく。目立つ汚れがなくとも一通り磨き、汚れが目立つものは念入りに磨く。シャワーのホースや鏡の縁までも丁寧に掃除し、完璧だと言える状態へと変えた。

「よっし、終わり」

一人呟いて、額の汗を手の甲で拭う。

浴場を出るとデッキブラシやタワシなどを掃除用具入れのロッカーへと戻し、入り口へと向かう。

途中、脱衣所の鏡に漣の姿が映った。

整った鼻筋に、少し切れ長だが穏やかな双眸の好青年がいる。女性も羨むさらさらの黒髪は適度に短く、少し日本人離れた線の細い顔立ちを自然に彩っている。

脱衣所などは既に掃除を終えてある。他に掃除する場所があるとすれば、外だ。

漣は入り口に立てかけておいた箒を手に、引き戸を開けて外へ出た。

春の朝はまだ少し涼しい。

空が綺麗に晴れていることに少しだけ笑みを浮かべ、漣は銭湯の入り口付近から掃除を始めた。青空にはところどころ白い雲が浮かび、ゆつくりと形を変えながら流れていく。時折、鳥たちが囀りながら頭上を飛んでいく。心地良いそよ風を感じながら、漣は穏やかな気分で掃除をしていた。

「おはようございます、漣さん」

不意にかけられた声に漣は振り返る。

門の近くに女性が立っていた。筋の通った鼻梁に、長い睫毛に彩られた穏和な目つきの女性だ。背の中ほどまでの長さの艶やかな黒髪を揺らして、漣に柔らかな表情を向けている。

無地のシャツとロングスカートという地味な服装だが、彼女の雰囲気や柔らかな物腰と口調は彼女の性格を表している。まさに清楚可憐と呼ぶに相応しい。

「ああ、おはようございます、佐久間さん」

漣も微笑んで挨拶を返す。

佐久間楓というのが彼女の名前だ。常連客の一人でもある。

「今日も早いですね」

「佐久間さんこそどうしたんです？ いつもより早いよね」

まだ朝の七時近い。

大学生である佐久間がこの時間帯に外出しているのは珍しい。近くの商店街も店が開くのは九時から十時頃だ。彼女が手に提げたバッグを見て、買い物というわけではなさそうだった。いつも大学に行く時に手にしていたものだったから。

「ええ、今日はサークルの集まりがあるんです」

「朝早くから集会ですか。今から学園祭の準備とか？」

「はい、何をするかの話し合いだそうです」

会話の妨げにならない程度に掃除を続けながら、漣は佐久間と言葉を交わす。

「あ、時間は大丈夫？」

ふと腕時計を見て、漣は尋ねた。

佐久間が通う大学へ行くには、銭湯の通りの先にある商店街を抜けてバスに乗らなければならない。バスの時刻が迫って来ている。今の時間のバスを逃したら次は二十分近く後になる。サークルの集會に間に合わなくなったりはしないだろうか。

「本当だ、行かないと遅れてしまいますね。それでは、また」

「お気をつけてー」

一礼して歩き出す佐久間に微笑んで、漣は掃除に意識を戻した。掃除を終えた辺りで、銭湯の前を賑やかな一団が通る。近くの小中学生達だ。

「あ、お兄ちゃん！ おはよう！」

「うん、おはよう」

元気に手を振る少女に笑みを返す。

澆刺とした少女が二人と、やんちゃそうな男子の他に、風邪をひいたのかマスクをつけている男子がいた。少女二人は瓜二つで、双子だ。見分け方は髪を右側で結っているか左側で結っているかの違いだけ。漣も最初は見分けがつかなかった。

小学生の後ろには中学生が数人見える。中学生に交じって、紺色のブレザーを着た高校生がいた。

「おっはよー！」

ポニーテールの女子高校生が漣に歯を見せて笑う。

隣で眼鏡をかけた中学生の少女が会釈する。

「おはよう、美咲ちゃん、香澄ちゃん」

姉妹に挨拶と笑顔で答え、漣は背中を見送る。

先ほどの小学生の双子と違い、性格が正反対の姉妹だ。姉の美咲は好奇心旺盛で積極的だが、二歳年下の香澄は臆病で人見知りしがちな少女だった。髪型と眼鏡の有無で印象が違って見えるが、実際は中々に似た顔立ちをしている。

続いて、どうにも敵意の籠った視線を向けてくる相手へと視線を向ける。

「おはよう、相馬君」

「……おはよう、ございます」

「ほんとに分かり易いね君」

睨むように挨拶する男子高校生に漣は苦笑する。彼は美咲と同じ高校に通っているのだ。

「まあ、頑張れ少年！」

そう言っただけ軽く背中を叩き、漣は相馬悠輔も見送った。

続く学生達も漣に挨拶をして通り過ぎて行く。漣はそれぞれに挨拶を返し、見送った。既に平日の日課と化している。

通学の時間帯が過ぎたのを見計らって、漣は掃除を終えて銭湯の中へと戻った。箒を片付け、銭湯の開業準備をこなす。本来は昼過ぎから夜遅くまでが営業時間だったが、周囲の客などを考慮して朝から入れるようにしていた。

準備を終えて番台に座り、数分の間ぼーっとしていると入り口の戸を開けて一際グラマラスな女性が入って来た。

「おはよう、漣」

どこか物憂げな視線に笑みを含んだ口調で漣を見る。豊満なバストを強調するかのよう胸元のはだけたシャツと丈の短いスカートを身につけている。引き締まったウエストもあって、スタイルは抜群だ。

「おはようございます、東條さん」

漣は笑顔を返した。

「朝風呂ですか？ 会社に遅刻しますよ？」

「今日は午後から行くわ」

漣の言葉に、東條麻衣はかたたるそうに答えて番台を通り過ぎる。

「これで一週間連続ですよ？」

「いいのよ、クビにはできないから」

悪戯っぽく笑い、東條が脱衣所に入って行く。

重要な役職にいるらしく、会社は無闇に東條をクビにはできないらしい。時間にはルーズなもの、しっかり仕事はしているらしく、余計に性質が悪い。しかも、かなりの手腕を持っているという噂も耳にしている。

漣は笑みを深めて、番台で頬杖をついた。

*

黄金色の空と銀色の大地から景色が一変する。一瞬の意識の途絶

を感じた直後、紫色の毒々しい空と紺色の大地が視界に広がる。

クーヤ・ウォルロフは溜め息をついた。

今見ている毒々しい景色だが、昔は当然のものだと感じていた。

何と言つても、ここがクーヤの故郷だったから。余り良い思い出はない過去を頭に浮かべそうになり、クーヤは渋い顔でもう一度溜め息をついた。

「……時間も無いし、さっさと終わらせて帰ろう」

長い金髪を右手でがしがしと掻いて、クーヤは歩き出した。首の後ろで纏めた金髪がクーヤの速度に合わせて左右に揺れる。

間も無く、レンガ造りの大きな城壁の前に辿り着いた。締め切られた門の前に鎧を身に着けた兵士が立っている。手には身長よりも長い槍を手にしている。門番だ。

「何者だ？」

定番の言葉に、クーヤは内心で舌打ちする。もう俺の顔を忘れたのか、もっと気の利いた言葉は言えないのか、と。

「クーヤ・ウォルロフだ。王に会わせる。参謀でもいい」

苛立ちを隠さず、クーヤは言い放った。

「クーヤ！ 貴様、なんの目的があつて……！」

槍をバツ字に交差させてクーヤを睨む門番に、今度は聞こえるように舌打ちした。

「うるせえ」

凄みをきかせるクーヤに、門番が引き攣った表情を浮かべて沈黙する。

「いいから通せ」

苛立ちを隠さず、クーヤを門番の頭を掴んで言い聞かせる。

やっぱり来るんじゃないかと、既にこちらの世界に来たことをクーヤは後悔し始めていた。

だが、クーヤには目的がある。達成するためにはこの世界を訪れる必要があったのだ。故郷とは言え、一度縁を切った土地にいるというのが自分で想像していたよりも苦痛だった。

腹の底がむかつくような感覚に苛立ちが増している。不快感で表情は不機嫌になり、言動も刺々しくなっていた。

「裏切り者を通す訳が無いだろう」

引き攣りながらも果敢に門番としての職を全うしようとする兵士に、クーヤはぎろりと視線を向け、一言告げた。

「燃やすぞ」

それだけで十分だった。

兵士の表情が青褪め、恐怖に染まり、引き攣る。身を退いたのを確認して、クーヤは強引に門を開かせて城壁の中、王都へと足を踏み入れた。

毒々しい空とは対照的に、王都には活気が溢れている。この世界では紫の空が常識なのだから、当たり前だ。

大勢の人が行き交う石畳の大通りを、クーヤは真っ直ぐに歩いて行く。正面には大きな王城が見える。この世界特有の希少鉱石をふんだんに使用した豪華な建造物だ。四つの円筒型の塔をそれぞれ繋ぐように通路が渡され、全てが中央の本殿へも繋がっている。

クーヤの視線は塔の一つに向かった。向かって右側奥の塔には一部崩れた部分がある。

「三年前のままか」

舌打ちする。

クーヤがこの世界から出て行くことになった決定的な出来事の跡がそのまま残されていた。

「……いるんだろ、出て来いよ」

小さく溜め息をついて、クーヤは背後へと言葉を投げた。

「気付かないとも思ってたのか？」

眉根を寄せ、クーヤは胸の高さまで右手を持ち上げる。

掌の上に微かに光が生じ、熱気を纏い始めた。一般の人々に気付かれない程度に陽炎を立ち昇らせる。

「止めなさい、クーヤ」

背後からクーヤの肩に手が乗せられた。

「何のつもり？」

首を動かして背後に視線を向ける。薄い紫の髪の女性が立っていた。クーヤを鋭い視線で油断なく見据えている。やや褐色がかった肌はきめ細かく、美しい。首までしつかりと露出を抑えた服であっても、突き出た大きな胸から括れた腰のラインはしつかりと見て取れる。ウエーブのかかった長髪の下には凛々しくも美しい瞳と鼻筋がある。王都でも一、二を争う美女だ。

「お前だけに話しても意味がない。王のどこまで連れて行け」

「そういうわけには行かないわ」

クーヤの言葉に女性が言い返す。

「そう簡単に俺がこつちに来るとでも思ってるのか？」

「何か意図があるとは考えているわ」

一度、離反したクーヤはこの世界を嫌っている。クーヤと関わりのおつた者ならば承知しているはずだ。

「戦いに来たんなら、もう燃やしてるぜ、俺は」

クーヤには告げた言葉を実行する力がある。それに、クーヤ自身が回りくどいやり方は好きではなかった。特に、自分が忌み嫌う世界を敵にする時は先手を取り速攻で片付けようとする。一秒の時間さえ関わりたくないとすら思っているのだから。

「あなたは底が知れない」

「はっ、良く言うぜ。本当は俺が嫌なだけなくせに」

クーヤは鼻で笑った。

底が知れないというのは嘘だ。クーヤは直情的な人間だ。何か裏をかこうとしても、耐え切れなくなると飛び出してしまふ。だからこそ、この世界からも離反しているのだ。旧知の仲なら理解しているに違いない。

「王に会った途端に殺そうとするとも思ってたんだろ？」

「……ええ、そうよ」

「俺だつて馬鹿じゃねえ。そんな無謀なことほしない」

きっぱりと頷いた女性に、クーヤは不満げに言った。

王の周囲には四賢人と呼ばれる者達がいる。彼らを同時に相手にすればクーヤにも勝ち目は無いに等しい。加えて、王自身も相当な腕前の持ち主だ。

クーヤでは離脱するので精一杯だろう。

ただ、周囲への被害は大きくできる。彼女が恐れているのはそこだ。

「アエラ」

「なによ？」

クーヤの言葉に、四賢人の一人であるアエラ・キーシエルは警戒心を剥き出しにしたままで答える。

「レーン・シユライヴがレグナを追放された」

アエラが目を見開き、息を呑んだ。信じられないといった表情でクーヤを見る。

「こつという話だ。俺にも意図はあるが、お前らにも悪い話じゃないはずだ」

口元に笑みを浮かべたいところだったが、この世界にいるという嫌気のせいでクーヤの表情は硬い。

「王に会わせる。お前が俺からの情報だと言ってもあいつらは信用しないかもしれないからな」

「……解ったわ」

ようやく、アエラはクーヤの肩を掴んでいた手を離れた。同時に、クーヤの前に歩み出て先導するように歩き出す。

クーヤは小さく溜め息をついてアエラを追って歩き出した。

*

銭湯は夕方から夜にかけてが一番忙しい時間帯だ。

特に、この周辺の寮やアパートは風呂の無いものが多い。勿論、風呂無しの寮やアパートは家賃が安く、主に学生達の住居になっている。

故に、銭湯の利用者は多い。

学生が多いために銭湯の利用料金も比較的安く設定してある。利用者は少なくない。経営状態は中々順調だった。

漣は番台に座って接客をしていた。とはいえ、既に新しく銭湯に入って来る者はほとんどいない。客のほとんどは既に脱衣所だ。

「いいねえ、ほんと」

漣は内心ほくそ笑んでいた。

番台の下、漣の足元には周囲からは見えないように精密機器が置かれている。パーソナルコンピュータの本体を足元に、薄く小型のディスプレイを本体の上に配置している。CPU、メモリ、ハードディスク共に相当なスペックを有する漣自慢の自作パソコンだ。

ディスプレイに映るのは裸の女性達だ。いや、服を着ている者もいる。さしずめ着替え途中の風景と言ったところだろう。

漣は艶かしい肢体を露出させて行く女性の動画を堪能していた。

「こんばんわ、漣さん」

「いらつしゃい、佐久間さん」

新たに現れた客、佐久間の声に漣は自然に対応していた。番台の下にあるものを全く感じさせない、いつも通りの漣の対応に切り替わっている。

「そういえば、漣さんが来てもう半年近く経つんですね」

漣に入浴料を払い、佐久間が脱衣所へと入って行く。

「もうそんなに経つんだね」

料金を受け取り、漣は感慨深げに答える。

佐久間が脱衣所の中に姿を消すと同時、ディスプレイに彼女が映った。漣は掌サイズの小型マウスでカーソルを動かし、ディスプレイを切り替える。今まで一画面の映像だったものが十コマ以上に分割され、同時に表示された。

漣は一つ頷いて、笑みを深める。

この仕事を引き受けて良かったとしみじみ感じていた。

漣がこの土地に引越して来たのは半年ほど前だ。就職先として

選んだホームヘルパーの仕事先で出会った老人がこの銭湯の持ち主だった。

彼の手伝いとして銭湯の仕事もこなすようになった。最初はあまり気乗りしていなかった漣だが、美味しいところを覚えたために積極的に仕事をするようになる。

漣が銭湯の仕事を手伝うようになって一月も経たないうちに、老人の持病であった腰痛が悪化した。彼自身での経営継続は困難な状況になり、漣の働きぶりを見ていたく感心した老人は銭湯を漣に任せると言い出した。

彼には息子達が何人かいたようだが、全員が都心の方へと行ってしまい、銭湯を継ぐのを嫌がったらしい。

「こんなに素晴らしいのになあ」

声には出さず、思う。

今では銭湯の経営者は漣だ。

「上がったよー」

湯気を立ち昇らせながら、元気良く女子高生の美咲が脱衣所から飛び出して来た。ほんのり汗ばんで湿った肌が美しい。

「今日は何を飲む？」

「カルピスで！」

「了解！」

即答する美咲に、漣は番台の直ぐ後ろに設置した冷蔵ラックから二百ミリリットルサイズの瓶を一つ取り出して手渡した。同時に美咲から飲料の代金を受け取る。

「そろそろ制覇だね」

飲料のラックを見上げて、美咲が得意気に呟く。

「じゃあ新しい飲み物追加しようか？」

「えー！」

漣の言葉に美咲が口を尖らせる。

「冗談だよ」

笑いながら言う漣に、美咲が胸を撫で下ろす。でもたまには入れ

替えようかな、と漣の何気ない呟きに美咲が反応した。文句を言っていた割には、入れ替え後の種類が気になるらしい。

「あの……」

番台の端に手を乗せた美咲の妹を見て、漣は直ぐに飲料ラックへと手を伸ばした。同時に、足でキーボードをつついてディスプレイをスクリーンセイバーの画面に切り替えるのも忘れない。

「あ、はいはい、香澄ちゃんは牛乳だったよね」

「はい、ありがとうございます」

牛乳を受け取る香澄の眼鏡が微かに曇る。まだ湯の熱気が消えていないようだ。

「お兄ちゃん！ 私達もー！」

香澄の直ぐ後ろにいた小学生の双子が両手を漣に伸ばしてくる。可愛らしい仕草に目を細めつつ、漣は牛乳の瓶を二つ取り出した。

「はいよ」

そう言っただけで差し出された手に瓶を置いてやる。

「ありがとうー！」

綺麗に声を被らせて、双子が牛乳に口を付けた。

「ほんじゃーね」

「おやすみ、二人とも」

手を振る美咲と香澄に微笑んで、漣は銭湯を後にする二人を見送った。

「また明日ねー！」

続いて出て行く双子を笑みで見送り、漣は脱衣所の方へ視線を向ける。

高校生以下の客が続々と出て行き、飲み物の販売をこなしていく。同時に、接客時の笑顔も忘れない。

「大忙しですね」

「この時間帯だからね」

脱衣所から出て来た佐久間の言葉に、漣は笑って見せた。

稼ぎ時でもあるのだ。大変だとは言えない。

「何か飲みますよね？」

「あ、はい。コーヒー牛乳でお願いします」

漣の言葉に佐久間が微笑んだ。

風呂上がりの女性は色っぽい。漣から瓶を受け取る佐久間の襟首から胸元が微かに覗く。少しだけ湯気を纏った胸の谷間を視界に納めつつも、漣は表情を崩さない。

内心では良い物が見れたと喜んでいるのだが。

「いつもありがとうございます」

「いえいえ」

空の瓶を受け取って、漣はにっこりと微笑む。

「それでは、また……」

「はい、おやすみなさい」

一礼して銭湯を後にする佐久間を見送り、漣は一息ついた。

新しく入る客は無く、出て行く者も少なくなっていた。そろそろ閉店の時間だ。誰も残っていないことを確認して、漣は閉業の準備を始めた。

脱衣所を一通りチェックして、落とし物などが無いかを確認する。

掃除は明日に回し、漣は番台に戻るとパソコンを操作し始めた。

記録された動画を早回しで確認しつつ、手馴れた操作でシーンを切り取って編集して行く。ごちゃごちゃして見難い部分やアップになり過ぎて判別できないものを切り捨て、遠過ぎる時は拡大処理を丁寧に施す。

「グッジョブ、俺」

にやりと口元に笑みを浮かべ、漣は呟いた。

と、突然締め切ったはずの入り口の戸が開け放たれた。視線を向けた漣は眉根を寄せる。

五人の男と三人の女が立っている。全員が同系列の服を着込んでいた。白を貴重とした、コートのような衣服だ。所々に青いラインが入っており、左胸の部分にはバッジのようなものがある。八方に放射状に光を放っているような、幾筋もの直線が描かれたバッジだ。

「ようやく見つけたぞ、レーン・シュライヴ」
先頭の男が、漣を見下すような目を向けて、告げた。
漣は、ただ溜め息を漏らした。

第二章 「異相の青年」

第二章 「異相の青年」

「今忙しいから帰れ」

開口一番に、漣はそう言い放った。

「よくもそんな口が利ける」

先頭に立つ男が不愉快そうに呟く。

全体的に線の細い男だ。中分けの短い金髪に、スマートな身体を持ち主だ。ぱつと見は優男といった印象だが、強い意思を秘めた瞳や目つきは逆のイメージを与える。

「もう関係は絶たれたはずだろ、ティーン」

大げさに溜め息をついて、漣も不愉快そうな視線をぶつける。

「そもそも言ってもらえなかった」

「へー」

興味の無いことを前面に押し出して、漣は視線をディスプレイに戻した。

「リヴドの連中が」

「聞きたくねえ」

漣の言葉にティーンが口元を引き攣らせる。

「レーン！」

「追放しておいて、協力しろってのは都合が良すぎるだろ」

漣は、かつてレーン・シュライヴと名乗っていた。同時に、レグナと呼ばれる世界にいた。

レグナ四戦司の一人ティーンはかつての仲間ということになる。

レグナという世界の中心都市、神都の統治者を支え、守護するのが役目だ。時には統治者の使者として様々な場に赴くこともある。

半年前、レーンはレグナを追放されてこの世界へと来たのだ。

「逆だ。上手く行けばレグナに戻れるかもしれないだろう」

「別に、戻れなくていいし」

「キサマ……」

「俺、こっち気に入ったから」

満面の笑みを浮かべて、漣は言ってやった。

今、漣がいる世界は居心地が良い。勿論、レグナとは違う様々な問題を抱えてはいるが、漣にとっては気が楽な世界だった。色々と期待されることも、漣が直接関わらなければならぬような面倒な争いごともない。

「リヴドに、宝珠が奪われた」

「あ、そう」

一切興味がないといったように、漣はディスプレイに視線を向けたまま返事をする。

流石に苛立ちを隠さず、ティーンが漣を睨み付けた。

追放した者の協力を要請するぐらいなのだから、相当な大事件だとは予想していた。だが、漣にとってはもう関係ない。

「心底見下げ果てた奴だ……！」

「なんとでも言え。俺はもうレーン・シュライヴじゃない」

苛立つティーンの言葉に、漣は鼻で笑って言い放つ。どれだけ言われようと痛くも痒くも無い、と。

「それとも、強引にでも連れて行くか？」

漣は不敵な笑みを浮かべ、挑発的な言葉を口にする。

ティーンが口を引き結んだ。力づくで漣をレグナへ連れて行くのが難しいと理解しているのだ。漣が操る力は一人が相手だろうと複数が相手だろうと対応できる。

かつてのレーンを知っている者達にしてみれば、今の漣を敵に回すことの厄介さが理解できるはずだ。

「……くっ」

ティーンが小さく呻いた。

漣を説得できないと、ようやく理解したのだろう。レーンと名乗

っていた頃、比較的近くにいたティーンはもう判断できてしまったのだ。交渉は無理だ、と。同時に、強行手段も成功する可能性は極めて低い。

「ほら、さっさと帰れ」

「そも行かないと言っただろ」

手をひらひらと振る漣に、ティーンが顔を苦悩に歪めながら言う。どうにも怒りが半分以上を占めているようにも見えるが、漣は無関心を決め込んだ。

ティーンが言葉を選んでいると、突然鈴の音が聞こえた。

小さいが、澄んだ音だ。細く、余韻を響かせている。音源は漣にも判別できた。

ティーンが左耳につけていたイヤリングだ。イヤリングとして下げられた結晶が細かく振動し、淡く光を放っている。

「お呼びがかかったみたいだな」

小さく笑みを浮かべて、漣は言った。

イヤリングの結晶は、連絡用のものだ。本来ならば会話もできる代物だが、別世界にいる相手と言葉を交わすのは無理だ。世界の軸が途切れているため、音で呼び出しを知らせるぐらいしかできない。故に、他の世界にいる際に呼び出しがかかったら重大な問題が生じたという印でもある。直ぐに帰還しろ、という意味なのだ。

「……サイ、お前は残れ」

「え？」

ティーンの言葉に、サイと呼ばれた女性が驚愕に目を見開いた。

栗色のセミロングの髪は右側が長く、左側は短い。後ろ髪は首筋を隠す程度だ。やや釣り目がちだがぱっちりした瞳を、今は大きく見開いている。ティーンの部下、騎士というだけあって、身体は引き締まっている。胸は標準から考えるとやや小ぶりだが、スタイルが良いために一見すると小さくは見えない。

「ん？ サイ？」

知り合いの名前に、漣も目を瞬かせた。

「な、何で私が！」

「あいつを監視し、説得してレグナに連れ戻せ」

「え、でも、え……？」

ティーンという言葉にサイが眉根を寄せて複雑そうな表情を見せる。

「なんだ、お前ティーンの下に配属されてたのか」

漣が何気なく呟く。

サイ・エスレヴェルは漣の後輩だ。彼女が見習いから正式な騎士になって直ぐに漣が追放されたため、サイがどの部隊に配属されたのかは知らなかった。

ただ、今のサイと昔漣が見た彼女ではどこか雰囲気が違う。確かにサイ本人なのだが、どうにも印象が変わっているような気がした。

「俺達は招集が掛かったから戻る必要がある」

「い、嫌です！ なんてあんな奴を……！」

「俺達も手が空いたら戻って来る。それまではお前に任せる」

「そんなあ……」

ティーンに諭され、サイが困り顔になる。上司の言葉に、部下は逆らえない。文句は言っても従うしかないのだ。

「無駄だから一緒に帰ってもいいぞ」

「なっ……！」

口を挟んだ漣に、サイが絶句する。

「難しいだろうが、頼んだぞ」

「え、ちょ、そんな！」

溜め息混じりにサイの肩に手を置いて、ティーンが銭湯から出て行く。部下達もそれに続き、サイを気の毒そうな視線で見ながらすれ違って行った。

サイはどこか見捨てられた子犬のように肩を落として、去って行く仲間を見つめていた。

漣はというと、既に盗撮した動画の編集に意識を向けている。

「……レーン」

「久しぶり、サイ」

名を呼ばれてから、漣は顔を上げた。

ティーンに対する態度とは明らかに違う口調だった。

「なんで？」

「なにが？」

険しい表情のサイに、漣は首を傾げて見せる。

「どうして断るの！」

サイは責め立てるような口調で漣を問い質す。

「どの道、戻ったって良い顔されないだろ？」

追放された漣がレグナに戻っても、失った信用が直ぐに回復するわけではない。信用とは、崩しやすく築きにくいものだ。どれだけ漣が良い働きをしても、過去は消えないのだから。

「だからこそ、やらなくちゃ信頼の回復もできないじゃない！」

サイが漣に迫る。

「だからこそ、やらなくちゃ。」

サイはそう言ったが、漣は元から乗り気ではない。むしろ、レグナに戻るつもりはなかった。

「俺はこっちで平穩に暮らしたいんだよ」

レグナはリヴドという世界と敵対している。レーンだった頃の漣は、レグナの主戦力の一人として戦う立場にあった。だが、あることがきっかけで漣はレグナを追放された。追放された先がこの世界だ。

他の世界と争うこともなく、平穩に暮らせるこの世界を、漣は気に入った。

「こっちはいい世界だよ、ほんと」

微笑む漣に、サイは怒ったような、納得できないような表情を浮かべる。

「……見損なつたわ！」

サイはそう吐き捨てる、踵を返して銭湯から出て行った。

「見損なつた、か」

漣は溜め息をついて視線をディスプレイに移した。

昔のサイはもつと好意的だったなあと思いつつながら、漣は手を動かして行く。麗しい美女達の肢体が映えるように、撮影された動画を編集していく。形の良いヒップラインや、引き締まったウエスト、バランスの取れたバストに口元は緩み、漣の意識は編集作業へと集中していった。

朝、目を覚ました漣は部屋を出たところにある流し台で顔を洗った。

銭湯の建物と接するように建てられた小さな小屋を漣は自宅としている。八畳程度の畳部屋と廊下が一つずつという簡素な小屋だ。敷布団を畳んでから押入れへと片付け、朝食の準備を始める。

冷蔵庫の中から適当に野菜を選んで刻むと、昨日の残りの味噌汁の中へと放り込む。少なくなった膏を増やして、一食分の味噌汁にした。自分でも雑だとは思いつつ、味噌汁の残りが勿体無いので使う。炊き上がった白米と、温まった味噌汁を器へ盛って小さな机の上に置いた。一つしかない椅子に座り、両手を合わせて箸を取る。

「便利だよなあ、こっち」

ふりかけの切り口を裂きながら、漣は呟いた。

この世界に来てからつくづく思うことだ。

レグナヤリヴドには単純な機械はあれど、この世界のパソコンのようなものは存在しない。冷凍食品やインスタント食品といったものもない。

厳密に言えば、レグナヤリヴドではこの世界ほど存在価値がないものなのだ。冷凍保存はレグナヤリヴド独自の原理で可能であり、機械の様々な機能を肩代わりする道具が他にある。

ただ、それでもこの世界にあるものは漣にとっては面白いものばかりだ。

ふりかけとあった、簡易的なおかずや、冷凍食品などの暖めたりお湯を注ぐだけで食べられる主食はレグナにはなかった。

元々、世界は一つだった。どこかで分岐した世界が異世界となり、

現在の状態へ繋がっている。文明の発展程度が違っていたり、技術力が違っていたり、世界そのものの法則が違っていたりと、異なる点はいくつもある。だが、世界が元々は同一の軸にあったという証拠もある。言葉と、生物だ。

人間という生物の存在と、言葉だけではどの世界も共通している。国が違えば言語も変わってくるが、どの世界にも必ず一つは他の世界でも通じる言語があるのだ。同時に、人間という生物が共通しているために、食物や料理も似通っている。

故に、他の世界に溶け込むことができる。漣のように。
「ゴミ多いのが難点だよなあ」
空になったふりかけの袋を見て、漣は呟く。

便利だが容器ゴミが尽く出るのがこの世界の難点だと思う。環境問題とも呼ばれて表面化していることでもあるが。

食事を終えた漣は器を片付け、部屋を出る。

小屋と銭湯は壁で接していても直接繋がっているわけではない。小屋から外へ出て、銭湯の建物へと入らなければならないのだ。

いつも通り銭湯の掃除を始め、湯の調節をして玄関付近を箒で掃く。

挨拶してくる子供達を笑顔で見送った。小学生、中学生、高校生と、朝の早い時間帯の子供達と挨拶を交わして掃除を続ける。

「意外だわ」

子供達が見えなくなっただけから、漣の隣にサイが現れた。

昨日見た、レグナの服装ではない。この世界の服を身に付けている。ワイシャツにジーンズという格好だ。

「意外って、何さ？」

服装については何も言わず、漣は言葉を返した。

この世界で漣を監視する、ということは暫くはこちらで生活するという意味だ。ならばレグナの服装で生活するわけにはいかない。

「あなた、こんなに慕われてたの？」

「頑張ったからね」

にっこりと微笑んで、漣は答えた。

銭湯で働き始めてから、漣は付近の人達との関係に気を遣った。挨拶は必ず行い、少しずつ信頼を得て来たのだ。今では皆、漣を慕ってくれている。

「じゃないと、客減るし」

漣は小さく苦笑した。

客が減っては困る理由がある。生活費などの金銭面での問題もあるが、漣にとっては別の理由が大きい。サイには言えないが。

「こんな朝早くからしつかり掃除までしてるのね」

「見直した？」

「まさか」

素っ気無くサイが顔を逸らした。

朝から綺麗に掃除を行うことでも漣は信頼を得て来たのだ。

「ま、趣味も実益も兼ねた良い仕事だからね」

少しだけ怪しく笑って、漣はサイから顔を背けた。サイは眉根を寄せていたが、気にせずに掃除を続ける。

「おはようございます、漣さん」

「はい、おはようございます、佐久間さん」

不意にかけられた言葉に、漣は今まで浮かべていた表情を一瞬で消し去って振り返り、笑顔で応対した。

「今日もサークルの集会ですか？」

「いえ、今日はこれを漣さんに……」

そう言って、佐久間は手にしていたバッグから小さな袋を取り出した。桃色の袋に、可愛らしくリボンで口が締められている。

「あら、そちらの方は？」

漣に包みを手渡す時に気付いたのか、佐久間がサイに視線を向けた。

「彩さいです。月城つきしろ、彩」

サイ、もとい彩が佐久間にこの世界での名前を名乗る。

「私の昔馴染みなんです。昨日、こちらに越してきたらしくて、ち

よつと話してたんですよ」

「え？ ちよつと……？」

漣の言葉に彩が目丸くした。

「そうだったんですか。私は佐久間楓と言います。宜しく願いますね」

優しげに微笑む佐久間に、彩が困惑する。

「佐久間さんは常連客の一人なんだ」

漣は笑顔を彩に向けて説明する。先程までと雰囲気の違い漣に彩は戸惑っているのだろう。解つていても、漣は何も言わなかった。

「お、クッキーですか」

「はい、サークルの皆に、と思つて作ったもののおすそ分けです」
漣さんにはお世話になってますから、と佐久間が微笑む。

「ありがとうございます。……うん、美味しいよ、とても」

一つ齧つて、漣は佐久間に笑みを返す。

甘過ぎず、それでいて薄過ぎず、後味がさっぱりしていて食べやすい。市販の高級クッキー並か、それ以上に上品な味だった。しつとりしたクッキーの食感と、隠し味か何かで入れたのか柑橘系の風味が絶妙だ。

「彩も一つどう？」

佐久間に目配せしてから、漣は彩にクッキーを一つ差し出した。

「あ、う、うん、じゃあ、一つだけ……」

おすおすと受け取つて、彩がクッキーを口に運ぶ。

「美味しい！」

彩が目を見開いて驚いた。

「本当ですか！ 良かったですね、また作りますね」

佐久間が柔らかく微笑む。

「余裕があつたらお願いします」

解りました、と佐久間が漣の言葉に頷いた。

笑みを交し合う漣と佐久間を、彩は黙つて横から見ている。手にしたクッキーをゆっくり齧りながら。漣は何も言わず、佐久間と会

話を続ける。彩の監視任務なのだと言想して。

「じゃあ、今夜、また立ち寄りさせて貰いますね」

「お待ちしてます」

大学へ向かう佐久間を漣が見送る。

「ふーん……」

佐久間が見えなくなつてから、彩がどこか不満そうに漣を見た。

「随分と態度が違うのね？」

「でも偽者の人格つてわけじゃないよ」

クッキーを一つ齧りながら、漣は答える。

相手によつて確かに態度は違うが、漣は二重人格ではない。多少は誇張している部分もあるが、ほとんど本音だ。嫌な相手には苛立ちを隠さず、好意的な相手には穏やかに対応する。誰でも同じ部分はあるのではないだろうか。

「もう一つ、いる？」

「いない」

漣が差し出したクッキーに、彩は首を横に振つた。不機嫌に見えるのは目の錯覚ではなさそうだ。

「もしかして、焼き餅焼いてる？」

「そんなわけないでしょ」

クッキーを口に運ぶ漣に、彩は馬鹿馬鹿しいと呟いて背を向けた。

「住む場所とかは確保したのか？」

「ご心配なく。すぐその商店街でアルバイトすることにしたら、背を向けたまま、彩が素っ気無く答える。どこか漣を馬鹿にしたような口調にも聞こえた。

彩が立ち去つてから、漣は小さく息を吐いた。

「昔だったら喜んで受け取ってたんだけどなあ」

やっぱり変わったな、と思う。きっかけに心当たりがない訳ではないが、過ぎたことを考えても仕方がない。どの道、漣にはどうしようもなかったことだ。

漣は気を取り直して掃除に意識を戻した。

日が傾いた頃、漣は番台で携帯ゲームに勤しんでいた。

レグナやリヴドにない娯楽の中で、漣の関心を最も惹いたものの一つだ。パソコン並の技術を惜しみなく使った機械の塊に、ゲームディスクやカートリッジロムをセットして遊ぶものだ。据え置き型と呼ばれる、テレビ画面に直接繋ぐハードもあるが、流石に番台ではできない。

携帯機なら本体にディスプレイがあり、テレビを必要とせずにプレイできる。

女湯の脱衣所を覗くための機器を密かに配置している漣の番台の中には電源が引いてあるため、電池切れも心配ない。

「最近の機器の進歩って凄いよなあ」
漣の本音だ。

レグナにいた頃、任務などで一時的にこの世界へ来たことがある。その時から漣はこの世界に魅力を感じていたわけだが、たった二、三年の間にゲームハードのスペックは上昇し、携帯機の画質やデータ容量も格段に向上している。精密機器の技術進歩には目覚ましいものがある。

小型カメラの画質は上昇し、動画編集プログラムも精度が高くなった。

夕方にはなつたものの、客が来るのはもう少し経ってからだ。学生の下校時刻を過ぎて、一時間か二時間後から客足が増えてくる。それまでは極めて少ない。勿論、ピークの時間帯まで客がいなければいけない。他の銭湯を比べたら多い方だ。

もっとも、今は客が全くいないわけだが。
「よお、探したぜ」

不意に聞こえた声に、漣は携帯機の画面から顔を上げた。

長い金髪を首の後ろで纏めた青年が立っていた。好戦的な切れ長の双眸と、整った鼻筋に長身のスマートな青年だ。昨夜訪れたティーンや彩と同じ白いコートを着ている。

「クーヤ……？」

漣は携帯機の電源を切った。

「あんまり驚かないんだな？」

「まあ、昨日の今日だし」

どこか不思議そうな表情を見せるクーヤに、漣は頬を掻いた。

「昨日？」

「あれ？ お前知らないのか？ ティーンが来たんだよ」

むしろ、クーヤがティーン達の行動を知らないことに漣は驚いていた。

「そっか、昨日だったのか」

期日だけ知らなかったらしく、クーヤが納得する。クーヤはそのまま少し考える素振りを見せる。

「お前はティーンのところには配属されなかったんだな」

「ああ、四戦司の下じゃない。もっと下の方だな」

漣の言葉にクーヤは苦笑した。

実力はあるが、クーヤはレグナで余り優遇されていない。彼がレグナの出身だというのが一番の理由だ。敵対する世界の人物であるが故に、クーヤは寧ろ冷遇されている。

「で、お前も俺にレグナに戻って言いに来たのか？」

「いや、違う」

漣の言葉に、クーヤは首を横に振った。

最初からクーヤにその気はなかった。漣には判る。尋ねたのは確認のためだ。

クーヤにはレグナを追放された過去がある。漣に近い位置にあると言い換えることもできる。ただ、クーヤの性格を考えれば漣を連れ戻そうとは考えない。レグナにいない漣の力を借りるぐらいなら二人分戦うと言い出すのがクーヤだ。

ならば何故、漣を尋ねて来たのか。

「俺に力を貸して欲しいんだ」

クーヤの口から出た意外な言葉に、漣はただ目を丸くした。

第三章 「意気投合」

第三章 「意気投合」

まさか、クーヤが漣に協力を求めてくるとは思わなかった。いや、クーヤの待遇や漣との関係を考えれば、彼が協力を求めることができるのは漣しかない。

クーヤが頼れる相手というのは本当に極僅かだ。離反したりヴドは勿論だが、レグナの間人もクーヤを快く思う者はいない。だから、クーヤと仲の良かった漣を奇異の目で見る者も少なからずいた。

「まあ、とりあえず着替える。その服装で入り口に立っていられたら困る」

漣は小さく息をついて、クーヤを銭湯の外へ連れ出した。

寝泊りに使っている小屋へ連れて行き、適当に服を見繕う。漣より長身のクーヤのために、できる限り大き目の服を引っ張り出した。

「……悪いな」

差し出された服を受け取りながら、クーヤが礼を言う。

「いや、お前のせいで客が減ったら困るし」

今の日本では、レグナの服装は奇抜な部類に含まれてしまう。レグナの騎士の制服を着込んだクーヤと漣が親しげに会話していたら周りの視線がどうなるか、考えたくもなかった。

変人に見られたが最後、今まで培って来た信頼関係が一気に崩壊してしまう。

客足が減ってしまったら覗きができない。漣の楽しみが大きく奪われてしまうことになるのだ。何としても防がなければならぬ。

「で、何に協力して欲しいんだ？」

コートを脱いで下着姿になったクーヤから視線を逸らして、漣は問う。男の着替えを見ても嬉しくもなんともない。漣が女だったら

違ったのかもしれないが。

「リヴドの戦力を奪いたい」

「戦争の終結ってことか？」

「いや、リヴドを戦えなくしたい」

クーヤは漣の言葉を否定した。

リヴドが戦争を続けられないぐらいの痛手を負わせてやりたいと言うのだ。だが、リヴドから戦力を消すというのはどう考えても戦争の終結だ。レグナが勝利し、リヴドが負けることと同義なのだから。

「それで、俺に何をしたいんだ？」

漣の言葉は了承という意味ではない。何をさせたいか、何をしたいか、という内容で判断することだ。漣の性格を知っているクーヤなら、理解しているはずだ。

「四賢人を動かした。そいつらを叩く」

クーヤの言葉に、漣はまたも目を丸くした。

四賢人と言えばリヴドの最高戦力だ。彼ら全員を戦闘不能にし、戦う力を奪えばリヴドとレグナの戦力関係は大きく傾く。

現在、レグナを支えているのは四戦司だ。彼らはリヴドの四賢人と対を成すような関係であり、二つの勢力が互角であるが故に均衡を保っていると言って過言ではない。

「動かした、か」

漣はクーヤの言葉を反芻した。

つまり、リヴドへ赴いて四賢人と言葉を交わしたということだ。

結果、四賢人を誘い出す算段が付いた、といったところだろう。

「あいつらを叩いて、終わりにする」

ほとんど、クーヤ自身の問題だ。様々な因縁に決着をつけたいに違いない。

だが、一人では困難な計画だった。だからクーヤは漣を自らの戦力に加えたいのだろう。

「それで？」

一通り聞き終えて、漣は尋ねた。

今度はクーヤが眉根を寄せた。漣の言葉の意味が解らないとでも言いたげに、首を傾げる。

「それで、その後どうするんだ？ そうするメリットは？」

クーヤの身の上は知っているし、決着をつけたがっているのも漣は承知している。

だが、漣はレグナとは縁を切った。戦うつもりは全くないのだ。特に、この世界では。

「四賢人が四人だけで来るとは思えない。きっと、精鋭部隊がついてくる。そうなったら、ただ大勢の人が死ぬだけじゃないか？」

ただ戦うだけで何が解決するというのだろうか。

レグナとリヴドは確かに戦争をしているが、最近はかなり沈静化している。睨み合っていることに変わりは無いが、膠着状態に陥っていた。双方、相手の出方を窺っている。安定していると言い換えても良いぐらいだった。

「この戦争に勝って、何が得られる？」

異なる世界同士での争いで、何が得られるというのだろうか。レグナもリヴドも領土は十分にあるため、土地を侵略する必要はない。植民地を作るメリットはない。どちらが勝ったとしても、得るものは無いようなものだ。

交易が可能になるぐらいだ。だが、交易が目的なら最初から争う必要はない。

そもそも、二つの世界が争っている理由は宝珠と呼ばれる存在が発端になっている。世界のパワーバランスを崩すほどの力を秘めた存在の奪い合いなのだ。レグナがリヴドを、リヴドがレグナを消そうとしているという話は一切ない。ただ、相手の世界に力を与えないがために、自分の世界の力を優位に置きたいがために戦っている。

「俺さ、もう無意味に戦いたくないんだよ」

気付いた時、漣は戦う意味を失った。

今では銭湯で働く爽やかなお兄さんだ。漣はこの生活を心底から気に入っている。大勢の人間を傷付けるより、人々を癒す今の仕事の方がずっといい。

「レーン……」

少しだけ、クーヤが寂しそうに表情を歪める。

「お前は、何のために戦ってる？ その違いだ」

漣は言った。クーヤにはクーヤの思いがあり、漣には漣の考えがある。自身の意思を他者に押し付けることはできない。いや、押し付けたとしても、受け入れるかどうかは相手次第だ。だが、漣の意思は固い。

「やっぱり、変わってねえな、お前は」

溜め息をついて、クーヤは苦笑いを浮かべる。

「元々、そう簡単に手え貸しちゃくれないことは予想できてたからな」

漣は度々、クーヤと戦ったことがある。勿論、クーヤがリヴドを離反する前だ。クーヤがレグナに来てからは、むしろ親しい友人という関係を築いている。

互いの性格は良く知っている。

「無駄だ、とは思わないんだな？」

漣は口元に笑みを浮かべた。

意思の固い漣を説得するのは困難を極める。

レグナでは外交能力が高いと評されるティーンも、漣を説得することはできなかった。勿論、ティーンが漣に対して侮蔑の感情を抱いていたことも原因の一つではある。だが、邪魔な感情を消して交渉できなかったという見方をすれば、ティーンの外資能力もさほど高いとは言えない。

「俺は諦めが悪いんだ」

クーヤも笑みを見せる。

敵の立場も味方の立場も知っているクーヤこそ、外交には向いているかもしれない。ただ、彼の直情的な性格が外交に適していると

は言い難いわけだが。

諦めの悪さはクーヤの長所であり、欠点でもある。離反した時、四賢人と戦って生き延びたのはクーヤの諦めの悪さが関わっている。同時に、レグナにいてもリヴドでの一件に決着をつけられなかったことを諦め切れずにいた。

「まあ、せいぜい頑張れ」

クーヤには何を言っても無駄だと、漣は知っている。だから、テインの時と違う接し方をする。クーヤ自身が、漣の意思を納得するまで付き合うしかない。

「解つてるとは思うが、暫くはこっちにいさせて貰うからな」

漣の予想通り、クーヤもこちらの世界に留まるようだ。

「泊まる場所とか、どうするんだ？」

「決めてない。泊めてくれ」

漣の問いに、クーヤは言い放った。

「そうくると思った」

どの道、クーヤは漣を説得しようとは何度も銭湯を訪れるはずだ。ならば、最初から漣の近くで生活をした方がいい。

「こつちでは最上空もかみくつや也って呼んでくれ」

「俺は小波漣だからな。間違えるなよ」

名前を確認し合うと漣は空也を連れて小屋を出た。

「お前が銭湯で働いてるとは思わなかったな」

ぼつりと空也が呟いた。

漣はただ口元い笑みを浮かべて空也に視線を返す。

「お前にも手伝って貰うからな」

「めんどくせえなあ」

空也はあからさまに嫌そうな顔をした。

「そう言うなって、いいもん見せてやるからさ」

銭湯の入り口から中へ入り、番台へと空也を引き入れる。

「うわ、なんだこれ！」

番台の裏側に配置された精密機器を見て空也が驚いた。

にやりと笑って、漣はパソコンを起動する。起動音も静かに、パソコンが立ち上がる。オペレーションシステムの起動を確認し、漣はマウスカーソルを動かしてアプリケーションをダブルクリックした。プログラムが働き、パソコンと接続されている機器が『全て』動き出す。

「そろそろだな」

腕時計を見て、漣は呟いた。

「おーっす！」

元気良くポニーテールの少女、美咲が銭湯へやって来た。続いて妹の香澄が入って来る。

「いらっしやい」

笑顔で漣は出迎える。隣に立つ、空也は姉妹と漣を交互に眺めていた。

「あれ？ その人誰？」

空也に気付いた美咲が首を傾げる。

「ん、俺は」

「太郎って呼んでやってくれ」

空也の言葉を遮って、漣は言い放った。

「はあ？」

思わず間抜けな声を出して、空也は眉根を寄せた。

「太郎さん、ですか？」

おずおずと香澄が尋ねる。

「いや違うから！」

大声を張り上げて否定する空也に、香澄がびくと両肩を震わせた。

「なんで太郎？」

「こいつ職なしでプー太郎だから」

「ああ！」

漣の回答に、美咲は納得したように両手を合わせた。

「納得すんな！」

「現に無職なんだから仕方がないだろう」

抗議の声を上げる空也を、漣があしらう。

実際、こちらの世界での空也は無職だ。

「でも何で太郎なんですか？ 前半分の方は……」

「被ったら問題になりかねない」

「……なるほど」

漣の一言に香澄は納得したらしかった。

「皆に言いふらしておいてくれ」

「りょーかい！」

笑みを浮かべた漣の言葉に、美咲が軍人のように敬礼する。

「止めんかい！」

空也の叫びも空しく、姉妹は脱衣所へと入って行った。

「お前、俺をからかうために呼んだんじゃねえだろうな？」

「ま、見てろ」

怪訝そうな表情の空也に、漣は打って変わって怪しげな笑みを浮かべた。

パソコンを操作し、漣は脱衣所内部の様子をディスプレイに表示させる。いくつか分割して表示された各カメラの映像の中から、映りが良いものを選択。拡大表示に指定する。

「こ、こいつは……！」

空也が言葉を失った。

先ほどまで親しげに漣が会話をしていた姉妹が脱衣所で衣服を脱いでいく。美咲が髪留めを解き、香澄が眼鏡を外していた。一枚一枚服を脱いでいく様が克明に映し出されていた。しかも、漣の操作によりありとあらゆる角度から、絶妙なアングルでの映像に切り替わっていく。

脱ぎ方を知り尽くしているが故のアングル操作だ。

「お、お前、これ、盗さ　！」

「ストップ」

叫びそうになった空也の首を掴み、強引に声を出せなくする。

顔を引き攣らせつつも、空也はディスプレイを凝視していた。見る見るうちに顔が赤くなっていくのが判る。

「お前、判り易い奴だな」

「悪かったな」

小さく呟く漣に、空也は口を尖らせた。

「どうだ、いいもんだろ」

邪な笑みを浮かべる漣には目もくれず、空也はディスプレイに映る姉妹を見つめている。特に、香澄の方を。

「こんばんわー！」

声と共に小学生が数人銭湯へ入って来た。

「うん、こんばんわ」

先ほどまでの笑みを一瞬で消し去り、漣が爽やかに対応する。

その様に空也は言葉を失っていた。表情だけでなく感情や声音すら完璧に切り替えている。別人格と思えるほどの変わり様だった。ただし、根底にある漣は変わっていないわけだが。

小学生達が男女別れて脱衣所へ入って行った。同時に、ディスプレイに映る脱衣所内部の様子もリアルタイムに変化する。

服を脱ぎ終えた姉妹の隣に小学生の双子、奈美と奈美がやってきて服を脱ぎ出す。中学生と高校生の姉妹と違って、脱ぎ方は少し雑だ。だが、その分早い。

「……お前、さっきも香澄ちゃん見てたよな？」

漣は空也に言った。空也は着替えの様子が映し出されたディスプレイを凝視している。新たに入って来た方を中心に。

「お前、まさかロリコ」

「それだけは違う」

漣の言葉を、空也は真剣に否定した。

「俺は胸のでかい女が嫌いなんだ」

空也は漣を真っ直ぐに見つめて言い放った。

「真顔でそんなこと言われても困るぞ」

「むしろ尻だ」

「意味がわかんねえよ」

「わからんか？ だから、このヒップラインがだな」

「詳しく聞きたくないわ！」

どんだんおかしな方向へ進んでいく空也に言い放ち、漣はディスプレイに視線を落とした。

「貧乳って言うな、微乳って言え！」

「何も言ってねえだろ！」

いきなり両肩を掴んで揺すってくる空也に、漣は呆れた。

「お前達、何を話している？」

威圧するような声と共に、漣の前に警察官が立った。

「げっ！」

「あ、堀田さん。いらっしやい」

警官の登場に慌てる空也を他所に、漣はいつも通り挨拶をしていた。同時に、右手だけ手袋を身に付ける。

無言で睨み付ける警察官・堀田へ、漣は手袋を嵌めた右手で小さな封筒を差し出す。

「今週の分です」

「うむ」

堀田は数枚の紙幣を番台に置いて封筒を受け取った。彼はそのまま銭湯を出て何事も無かったかのように去って行った。

「どういうことだ、これ？」

「まあ、ちよつとした小遣い稼ぎさ」

釈然としない様子の空也に、漣は言った。

封筒の中にあるのは漣が撮影、編集した動画を収めたディスクだ。

堀田は漣からDVDを購入している。

「相手は警察官なんだろ？」

「大丈夫、抜かりは無いよ」

不気味に笑う漣に、空也は身震いしていた。

相手が誰であろうと、漣が撮影しているという事実は漏洩しないようにしてある。無論、本人にもしっかし契約させている。

「もし、俺のことが漏れたら、知った奴ら全員を社会的に抹殺すればいい」

「……確かに、お前ならできそうだな」
空也が引き攣った笑みを浮かべた。

堀田は威圧的だったが、表面だけのものだ。優位に立っているのは漣で、彼はおこぼれに授かる立場でしかない。内心でわきまえているからこそ、漣が手を差し出さなくとも代金を支払っている。

「こういうのの準備って、金かかるからさ」
言って、漣は笑った。

最新鋭のパソコンに、増設したメモリやCPUなど、設備には結構な金がかかった。カメラの取り付けのための、壁の中への配線やスペースの確保なども全部漣一人で行った。当然ながら、業者に頼むわけには行かないからだ。

「よくやるよ」

呆れたように空也が苦笑する。

「やるなら徹底的に、な」

趣味のためには金や時間を惜しまない。今の漣の心情を言い表すならこれだろう。

「こんばんわ、漣さん」

「ああ、佐久間さん、いらっしやい」

不意に入って来た佐久間にも、漣は一瞬で表情を切り替えて対応する。

「あら、そちらの方は？」

空也に気付いた佐久間が小首を傾げた。仕草に髪が揺れる。

「太郎です。古い知り合いなんですよ」

「だから違うつってんだろーが！」

漣の言葉に空也が叫ぶ。が、漣は無視した。

「あ、今朝のクッキーご馳走様でした」

「喜んで頂けたみたいで良かったです」

にっこりと微笑む漣に、佐久間が柔らかい笑みを浮かべた。

「また焼きますね」

「はい、お願いします」

笑みを交わしてから、佐久間が脱衣所へと入って行く。

「……お前、あいつが好きなのか？」

漣と佐久間の会話に割り込みなかった空也が問う。会話に参加できなかつたためか、どこか控え目な口調だった。

「うん？ 好きだよ？」

素直に漣は頷いた。

「それ、ほんと？」

彩がいた。番台の前に立ち、漣を見つめている。

空也は視界に入っているのだろうが、彼女にとってはどうでもいらしい。顔見知りではあるため、自己紹介の必要はないが。

「嘘ついてどうするんのさ？」

漣は不思議そうに首を傾げて見せた。

佐久間は素敵な女性だ。穏和で、気遣いもある。誰にでも優しく接し、包み込む力のある女性だ。

「皆好きだよ、俺は」

漣は笑った。下心のない、本当の笑顔で。

銭湯で働き始めた当初から、付近の住民達は漣に良くしてくれた。漣も人見知りするような性格ではなかったが、直ぐに打ち解けることができた。

「……そう」

どこか不満げに、彩は息をついた。

「で、今日は何しに？」

「客よ、今日はね」

問い質す漣に、彩は答えて脱衣所へと進んでいく。

番台の下に隠してあるディスプレイにも彩が映るのを確認して、漣は一つ頷いた。

「お前、罪悪感とかないのか？ 後ろめたさとか……」
空也が小さく呟いた。

「何言つてんだよ、忘れ物があつても誰のものか確認できるだろ？」
人がいる間、ずっとカメラを回していれば誰が何を忘れたかを後で確認することができる。

「にしちゃあ、女湯の脱衣所しか映ってないような気がするぞ」

「男の裸なんて見たって嬉しくねえよ」

「そりゃそうだけどさ……」

真面目な顔で言い放つ漣に、空也が苦笑する。

「もしかして、お前」

「いや、俺も女湯のが見たい」

すつと視線を細めた漣に、空也も真顔になつて答えた。

「最初からそう言つてりゃいいんだよ」

くくつ、と漣は笑う。

「中までは見れないのか？」

「機材が足りない。今金貯めてるところだ」

空也の問いに漣は小さく溜め息をついた。

本当は脱衣所だけと言わず中まで見たい。だが、浴室は広い。全ての箇所をカバーできるようにカメラを配置するためには資材が足りなかった。勿論、資材を買う金も足りないわけだが。

「貯めてるつたつて、こんだけの機器揃えられてんじゃん」

「やるからには中途半端なことはいしない。完全に準備が揃つてからだ」

呆れたような空也の言葉に、漣は言い返した。

確かに、現在の状況でも漣の持つ機器はかなり高性能だ。配線やシステムも完璧に組まれている。

だが、浴室内までをカバーするとなると話は別だ。現状の構成では脱衣所内が限界でもある。ディスプレイとパソコン本体をもう一セット用意するぐらいはしなければ作業が追いつかない。加えて、脱衣所と違って浴室の中は湯気がある。精密機器を配置するには湿気などの水分や温度への対応も必要になってくる。

十分に費用が溜まつてから、完璧にやらねば意味がない。徐々に、

設置していくという方法もあるが、途中で失敗したら終わりだ。やるなら最初から完璧にやらねば。

空也もそれ以上は突っ込まず、ディスプレイに視線を落としていた。漣が来客に対応するときだけは顔を上げていたが。

「上がったよー」

暫くして、美咲が脱衣所から出て来た。後から香澄と、奈美、美奈の姉妹が出て来る。

「今日は何にする？ あ、ちょっと牛乳三つ取ってくれ」

美咲に尋ねた後で、漣は空也に牛乳を取るように指示した。香澄と双子は毎回牛乳を頼んでいた。たまに違う時もあるが、大抵牛乳だ。

「何か新しいの入れた？」

香澄達に牛乳を渡す漣に、美咲が問う。いつの頃からか、美咲は銭湯で用意している飲料を全種類飲もうとしていた。

「青汁とかどうよ？」

「ほんとにあるの？」

爽やかに言い放つ漣に、美咲は真剣な表情で聞き返した。

「あつたら頼む？」

「うー……」

「冗談だつて」

本気で悩む美咲に、漣は笑う。

「頼むから入れないでよね。今日は苺牛乳にしとこうかな」

美咲は安心したように苦笑して、注文した。

「あいよ。おら、太郎、取れ」

「違うっつってんだろーが！」

否定しつつも、空也は律儀に苺牛乳を漣に渡した。

「取ったつてことは君は太郎なわけだ」

「てめえ……」

しれつと言いつつ漣に、空也が怒りで肩を震わせる。

美咲が笑い、香澄達もつられて笑った。漣はにやにやと笑みを浮

かべて脇に立つ空也を見上げる。からかわれているのだと気付いていても、受け流せないのが空也であった。

客がいなくなり、銭湯を閉じる準備も終わると、漣は空也を連れて小屋に入った。夕食は番台にいる間に握り飯などで済ませてある。なにしる、銭湯が閉まる時間は大抵夜の十時以降になる。場合によっては十二時近くになることもあるのだ。昼はともかく、最も客の多くなる時間帯に夕食で抜ける訳にはいかない。かと言って食べないでいるのも辛いいため、番台で食べている。

「何してんだ？」

部屋に入った漣がノートパソコンを起動させているのを見て、空也が問う。

「編集作業。終わったら寝るからな」

漣は今日撮影したビデオデータが入っているディスクを持ち上げて答えた。ノートパソコンのディスクドライブに動画を記録したDVDを入れて、編集プログラムを起動する。

「手馴れたもんだな」

要領良く編集していく漣を見て、空也は感嘆の息を漏らした。

見栄えが良くなっていく脱衣所の様子に、空也の視線が釘付けになる。漣は小さく笑って、作業をこなしていった。

「コピーしてやるうか？」

「頼む」

漣の提案に、空也は即答していた。

編集作業を終え、コピーしたディスクを空也に渡した漣は寝る準備を始めた。来客用の布団を押し入れから引っ張り出して部屋の隅に用意する。空也の寝る場所だ。

全ての仕事が終わった漣は直ぐに眠りに付いた。明日の朝も早いから。

*

眠りについた漣を見て空也は微かに視線を細めた。

電気の消された部屋だが、カーテン越しに外の明かりが僅かながら入って来る。暗くはあるが、目が慣れればぼんやりと部屋の中が見渡せた。

いいものを見た、と思う充実感と共に、空也には後ろめたさがあった。

漣は銭湯に来る客達を騙している訳ではない。本心から彼女達に着替えを覗きたいと思っているに違いない。彼女達に接する漣と、脱衣所の様子を撮影する漣は両方とも彼の本心だ。

だが、空也は違う。

漣を騙している部分があった。

「すまん、レーン……」

空也は小さな声で謝った。

かつて、リヴドを離反してレグナに渡ったクーヤを、レーンは一人の人間として扱ってくれた。クーヤの考えに理解を示し、冷遇する者達とは逆に、公平に見てくれたのだ。

嬉しかった。かなりの恩を感じている。唯一無二の親友とすら思うほどに。

「協力してくれなんて言っただけで、本当は……」
ぼそぼそと口の中で言葉を転がす。

「戦わざるをえないようにしてあるんだ」

口を引き結んで、心の中だけで呟いた。漣には申し訳無いと思っているが、空也には他に良い手が思いつかなかった。もしかしたら、漣との信頼関係をも断ち切ってしまうかもしれない。

だが、もう時間はない。

戦いの時は、迫っている。

第四章 「空也の計略」

第四章 「空也の計略」

朝、漣は寝ている空也を他所に一人で銭湯の準備を始めていた。浴室の掃除から、湯の温度調節まで全てをこなす。勿論、朝食は軽く食べて。

浴室と脱衣所の掃除が終わると、玄関先へ出る。いつも通り、漣は掃除を続けていた。

銭湯の前を、漣に挨拶しながら子供達が通って行く。

「いつもこんなに早いのか？」

小学校から高校までの生徒の通学時間が終わったところで、空也が小屋から出て来た。欠伸をして、眠そうに目をこすっている。

「毎日こんなもんさ」

当然だと言わんばかりに笑みを浮かべて漣は返した。

空也は、漣がもっと遅くまで寝ていても問題無いとでも思っていたに違いない。レグナヤリヴドと違い、この世界では漣が戦いに駆り出されることはない。戦いに備えて規則正しい生活をする必要性はないのだ。

勿論、最近の銭湯は昼から開店するものが多いため、漣もまだ寝ていて問題は無い。

「親しくなっておくとき、客足増えるんだよ」

箒で掃除を続けながら、漣は言った。

付近住民の中には風呂の無いアパート暮らしの者も多い。親しくなればなるほど、足を運ぶ機会は増える。嫌われて客がいなくなるのは当然だ。

「それに、こういうのも中々良いもんさ」

僅かに目を細め、漣は呟いた。

今まで戦うことばかりに意識を向けていたためか、漣にはのんびりした生活が気に入っていた。

「何故かこの辺は綺麗な女性も多いし」

「少し羨ましくなってきた」

どこかすつきりしたような笑顔の漣に、空也は溜め息をついた。

「何なら、お前もここで暮らすか？」

少し考えて、漣は空也を横目で見て問い掛けた。

人手が欲しいと思うことはある。だが、脱衣所に仕掛けたカメラなどの関係から人を雇うことはできずにいた。勿論、漣は人を雇うことは最初から考えていないわけだが。

もつとも、空也なら話は違ってくる。彼は漣にとっては身内のようなものだ。空也なら漣が懸念しているような問題は起こさないだろう。

「考えとく」

呆れたように肩を竦め、空也は答えた。

「ま、うちに居候している間は働いてもらっけどな」

「働くって、何するんだよ？」

「掃除とか。とりあえず今日は大目に見てやる」

空也の問いに漣は答え、笑みを浮かべた。

つまり、明日からは朝早く叩き起こすと言っているのだ。

「えー」

露骨に嫌そうな顔をする空也を、漣は冷ややかな目で見つめる。

「嫌なら飯抜きな」

「何だよそれ」

「タダで置いてやるとは言っていないだろ。昨日言ったこと忘れたのか？」

抗議の声を上げる空也に向けて、漣は言い放った。空也がまた溜め息をついた。

掃除もそろそろ終わるかというところで、銭湯の前を佐久間が通りかかった。

「おはようございます、佐久間さん」

「あ、おはようございます、漣さん。それと、太郎さん」

漣の挨拶に、佐久間は微笑んで挨拶を返した。一緒にいた空也にも。

「俺、太郎違います。昨日も違うって言ったと思うんだけど」

「え、でも美咲ちゃんがそう言っていましたよ？」

肩を落とす空也を見て、佐久間は不思議そうに首を傾げた。どうやら、昨晚の空也との会話は記憶に残っていないらしい。単に空也が違つと叫んだだけで、後は漣との会話に意識が向かっていたようだ。

故に、漣が言いふらしてくれと頼んだ美咲の言葉を鵜呑みにしたのだ。

「律儀に言いふらしやがって……」

空也が頬を引き攣らせる。

「まあ、そのうち慣れるよ」

「慣れたくねえよ！」

笑う漣に、空也が大声を上げた。

戻る、ではなく、慣れる、だったことを聞き逃さなかったようだ。

「仲が良いんですね」

「まあ、昔の親友ですから」

くすくすと可愛らしく笑う佐久間に、漣は少し懐かしそうに微笑んだ。

親友という言葉聞いた空也が僅かに視線を逸らしたことに、佐久間に目を向けていた漣は気が付かなかった。

「そういうの、いいですよね」

「佐久間さんもいるでしょ？」

「ええ。大学が違うのでほとんど会えませんけれど」

佐久間は付近の大学へ通うために一人暮らしをしている。高校時代の友人達とは進路の関係で離れ離れになってしまったようだ。たまに連絡を取り合うぐらいなのだろう。

「だから長い休みの時に会うと凄い長い時間話し込んでうんですよね」

「そうそう」

佐久間の言葉に漣は笑顔で相槌を打つ。

本当に親しい友人との縁は中々切れないものだ。連絡が疎遠になりがちでも、直接会えた時には話題が尽きない。今まで中々話す時間が取れなかった分を語り合うのだ。いくら時間があっても足りない。毎日のように顔を合わせていた頃よりも、ずっと濃度の高い会話になる。

「あ、そうでした。またクッキー焼いたんですよ」

佐久間が思い出したようにバッグの中から紙包みを取り出す。

「え、本当ですか!」

「ええ、昨日作った時の材料がまだ少し余っていましたから」

昨日のような袋ではなく、紙包みであるところを見ると、以前の時よりも量が多いようだ。

「ありがとうございます。後でおやつとして頂きますね」

微笑む佐久間から、漣は笑顔で紙包みを受け取った。受け取った包みは、予想よりも重く感じた。勿論、クッキー自体は軽いものだが、見た目で予想していたよりも量が多く感じたのだ。

本当に余りものの材料で作ったのだろうか。

漣は深く聞かずに礼だけを言った。実際、佐久間が手作りした菓子は味が良い。元々料理が好きなのだろう。いつか彼女の手作りも食べてみたいとすら漣は思っていた。

「なあ、あんたこいつのことどう思ってるんだ?」

会話が一区切りついたところで、空也が口を挟んだ。

「え?」

佐久間が驚いたように空也に視線を向ける。

「すげえ仲良さそうに見えるんだけど」

空也は漣と佐久間を交互に見ながら呟いた。

実際、二人の会話は妙に割り込み辛いところがある。会話に割り

込んでくるのは小学生か元気の良い美咲ぐらいだ。時間帯やタイミング的な部分も多いが。

「私は、好きですよ」

照れたように佐久間は笑った。ほのかに頬が赤く染まっているようにも見える。

「俺も佐久間さんのことは好きだよ」

「えっ……？」

漣の言葉に、佐久間が小さく声を上げた。目を丸くして漣を見ている。

「それは、恋愛対象として？」

少し意地悪そうに空也が問う。佐久間の顔は先ほどよりも赤くなっていた。

「さあ？」

ふふっ、と漣は曖昧に笑った。

内心では、佐久間と結婚しても悪くは無いなと思いつながら。

佐久間の方へ視線を向けた漣から表情が消えた。目が見開かれ、いつもの漣の雰囲気失せる。

漣の視線は、佐久間の後方に現れた影達へ向けられていた。

「どうした？」

「漣さん？」

空也と佐久間が漣の様子に気付いた。空也だけは、漣の視線を追うことで状況を理解していた。漣と同じく、身体を強張らせる。

張り詰めた空気を、漣が破った。

無表情が、刃を手にした戦士のような面構えに変わる。吊り上げられた目に、佐久間が息を呑んだ。同時に、漣は踏み出していた。

佐久間の右手首を掴み、引き寄せる。漣は左足を軸に、右足を引いて身体を半身にして佐久間を背後へと回した。一瞬のことに佐久間が驚き、ふらついて尻餅をつく。

銭湯の前の道路には十人以上もの人影が立っている。全員が、紺色の外套を身に纏っていた。彼らの中で、一人だけが一步前に出て

いる。リーダー格は女性だった。

漣も、名前を知っている。

アエラ・キーシエル。リヴド四賢人の一人だ。

「レーン・シュライヴ、確かに追放されているようね」

威圧的な口調で言葉を紡ぐアエラを、漣は無言で見つめる。表情を変えず、体勢も自然体のままで。

状況が判然としない。

確かに、と言ったところを見るとレグナにいる人間の誰かがリヴドへ情報を流したことになる。問題なのは、誰が、ではない。何の目的で情報を流したか、だ。

何の目的も、理由もなく情報が流れるとは思えない。

「どちら様ですか？」

どこか刺々しさを含んだ口調で、漣は問う。

「交渉に来たのさ」

アエラが口元に笑みを浮かべた。

漣の目がすうつと細められる。研ぎ澄まされた漣の視線に、アエラの背後の何人かが身震いしていた。

「佐久間さん、大学に遅れますよ」

少しだけ振り返り、漣は佐久間に告げた。できるだけ、優しい表情を見せて。

「あ、は、はい………！」

この場から逃げる、という漣の意図を汲んでくれたのか、ただここにいてはいけないと思ったのか。佐久間は慌てたように立ち上がると、漣とアエラの間を通過して道路へと出て行った。

目の前を通り過ぎた佐久間は恐怖と困惑の入り混じった表情を浮かべていた。

無性に腹が立った。

ゆっくりと時間をかけて築き上げて来たこの世界での人間関係が崩れそうになっている。いつも穏やかで、どんなことも優しく見守るように微笑んでいた佐久間から、笑顔が消えていた。

もしかしたら、もう二度と彼女の笑顔は見る事ができないかもしれない。

気絶させて、何も無かったことにもできた。だが、漣は佐久間に痛みを与えたくなかった。だから、逃がした。

「先に言っとくけどな」

アエラが口を開き、何事か喋ろうとした瞬間に、漣は割り込んだ。「俺はお前らの仲間にもならねえし、レグナの味方をするつもりもない」

「……ほう？」

漣の言葉に、アエラが興味深そうに相槌を打つ。

「戦うなら、お前らだけでやれ。俺も、この世界も、巻き込むな」

漣は視線に殺気を込める。アエラが息を呑んだ。

「そういう訳にもいかないのよ」

アエラは漣を睨み返した。

「知っているはずよ、事情は」

アエラの言葉に、漣は何も答えない。

漣もレグナで戦っていた当事者の一人なのだから、事情を知らないはずがない。

「私達は、あなたが持っている宝珠を回収するために来たの」
ゆっくりと、アエラは言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

宝珠、手にしたものに絶大な力を与える結晶体を指す言葉だ。レグナとリヴドの戦争の原因でもある。

レグナとリヴドは世界としての位置が極めて近い。故に、最も行き来もし易い関係にある。世界観も類似している部分が多く、技術や文明もほぼ同程度だった。

宝珠は、レグナとリヴドで発見された物質だ。この世界には存在しない。

一つ一つが異なるエネルギーを内包し、生命体の意思に呼応して周囲に力を解き放つ。限界が計測できない程の莫大なエネルギー容量を持つ宝珠は、今やレグナとリヴドの文明を支える技術の一つだ。

レグナとリヴドでは、宝珠を研究して得られた情報を元に、擬似的な宝珠を生み出した。エネルギー容量には限度があり、精製も容易ではない。だが、二つの世界では擬似宝珠が生活必需品になっていた。勿論、日常生活に使うものは出力を抑えられた一般家庭用に調整されている。

「回収、ねえ」

興味無さげに、漣は呟いた。

宝珠は、レグナとリヴドの二つの世界で確認されているだけでもたったの二十個しかない。宝珠が持つ力は生活を豊かにするだけではなく、武器にもなる。

レグナの四戦司、リヴドの四賢人はそれぞれ一つずつ宝珠を持っている。残る十二個のうち二つは、レグナとリヴドそれぞれが擬似宝珠を作るためのベースとして保持していた。

レグナとリヴドには丁度十個ずつの宝珠があったのだ。

「万全を期すためにね」

アエラは言った。

宝珠の数はレグナとリヴドのパワーバランスでもあった。

漣は、宝珠を持っている。漣がこの世界に追放されたことで、レグナは宝珠の一つを失った。

ティーンが漣を連れ戻しに来た理由だ。宝珠と、それを扱える漣を連れ戻すことでレグナのパワーバランスを戻そうとしたのである。漣の追放はレグナ統治者達の総意だ。漣を連れ戻すと提案したのは恐らくティーンなのだろう。一時的に戦力として復帰させ、リヴドからの攻撃に備える、というところか。

「で、俺の宝珠でレグナを叩こうってか？」

漣は問う。

いつから、宝珠の数で競い合うようになったのだろうか。漣が生まれた時には、既に戦争は始まっていた。一般人だった頃の漣は全く知らない事実だった。

他の世界の存在や、いがみ合いといったものは、一般人には公開

されていない。国を治める者や、直属の防衛戦力に所属する者達しか知らないのだ。

「宝珠だけ、くれるかしら？」

アエラは挑発的な口調で言った。

「知ってて言ってるだろ、お前」

漣は溜め息をついた。

宝珠を持つ者同士は互いに面識がある。戦いに駆り出され、何度も衝突しているのだ。好敵手として認め合っている者すらいるほどだ。

レグナで戦っていた際、漣はアエラと何度か戦ったことがある。

漣が勝利する場合は多いが、アエラは必ず逃げ切っていた。四賢人の一人というだけあって、彼女は引き際を心得ていた。

何度か争っているため、アエラは漣の力を知っている。同時に、漣が宝珠を手放さない理由も。

「俺さ、今すげえ気が立ってるんだよ」

右手で前髪を掻き揚げて、漣は言い放った。全てを見抜いた上で、見下すような視線をアエラ達に向ける。

戦争や勢力が云々より、漣には自分の日常が崩壊の危機に立たされていることの方が重大な問題だった。

「アエラ、退け」

漣は命令するような強い口調で告げた。

「さもないと、お前の部下全員、再起不能になるぞ」

すうっと、漣の目が細くなる。鋭さはない。ただ、怒りや恨みといった感情の籠った瞳がアエラ達を射抜いた。

「死にたくない奴は逃げ出せ」

言い、漣は左手を水平に持ち上げた。掌を地面に向けたまま、アエラ達の方へ指先を向ける。

漣の胸が熱くなった。胸の中央に、熱い力の流れを感じる。結晶体に封じ込められたエネルギーが内部を駆け巡り、力を周囲へ放出しようとしていた。

炎のような熱の流れは漣の胸から身体の中へと浸透していく。身体の内へと伝わった熱量は、漣が持ち上げた左腕の中を駆け巡る。指先や掌から、力が溢れ出す。

漣の意思という指向性を得た力が、アエラ達へと放たれた。

宝珠を扱うアエラだけは漣の攻撃に気付いたらしく、塀に背中がぶつかるまで後退する。

直後、アエラが連れて来た部下達に異変が起こった。

ある者は急に頭を抱えて苦しみ出し、またある者は目を見開いてがたがたと歯を打ち鳴らして恐怖に震えた。他にも涙を流して許しを請う者や、道路に座り込んで茫然自失とする者、目を見開いたまま気絶して倒れる者、口の端から涎を垂らして目を回す者など、様々だ。

共通しているのは、全員の心が恐怖で満たされているということだ。

「レーン……！」

アエラの表情に焦りが浮かんだ。

「今、帰ると言えば部下は助けてやってもいい」

「なんだと……」

見下したような漣の言葉に、アエラは噛み付いた。

アエラは自分の失敗に気付いたようだった。四賢人の一人である

アエラなら、漣とも互角に戦える。しかし、部下の存在は漣の前ではただの足手纏いだった。

「同士討ちさせてやるのか？」

嘲るように漣が言い放つ。

アエラが噛み締めた奥歯が音を立てた。

「解った、退く」

苦渋に満ちた表情で、アエラは漣の提案を呑んだ。

漣は左手を下げた。

途端に、部下達が正気に戻る。いや、正確には恐怖の対象が消え失せたのだ。脂汗を浮かべて荒い呼吸を整える部下達を見て、アエ

ラは唇を噛み締めていた。

「とつとと失せる」

言い放つ漣を睨みつけ、アエラは擬似宝珠を取り出して部下と共に姿を消した。

アエラがリヴドへ帰るのを見届けてから、漣は大仰に溜め息を吐いた。今まで胸につかえていた嫌悪感を全て吐き出して深呼吸する。「戦わないのか？」

今まで黙っていた空也が漣に問う。

「言っただろ、もう戦うのめんどくせえんだよ」

漣はあからさまに苛立った口調で答えた。言葉使いがぞんざいなのは、漣が不快感を抱いた直後だからだ。治まらない苛立ちを静めるように、漣は目を閉じて大きく息を吐き、吸い込む。

「あの様子じゃ、またきそうだな」

「来るだろうな」

空也の言葉に、漣は呟いた。

恐らく、次にアエラが現れた時は漣を殺すつもりでかかってくるだろう。漣の態度や行動に相当な屈辱感を抱いていたはずだ。今の漣同様、彼女も気が立っているに違いない。

「空也、お前、後で憶えてるよ」

漣の言葉に、空也の肩がびくんと跳ねた。

「れ、漣……？」

恐る恐るといったように漣の顔を覗き込んで、空也は絶句した。

先ほどまでアエラ達に向けられていた視線があったからだ。漣は空也を彼女達と同じ目で見たのだ。

「最初からおかしいとは思ってたんだよ」

漣が呟く。

そもそも、空也がティーンの動きを把握していなかったというのが最初の問題点だ。ティーン直属の部下ではないが、一度は追放した漣に再び接触するということはレグナ側にとっては重要なことだ。一般人は知らなくとも、四戦司と肩を並べても見劣りしないだけの

力を持つ空也が情報を得ていないはずがない。リヴドからの参入者ということ冷遇されてはいても、実力はある。ティーンが動くことは知っていても、期日を知らなかったというのがおかしいのだ。ティーンが漣に接触するということが決定してから、期日が決まるまでの間に空也は単独で動いていたということになる。

「それに、あいつらがいる間はお前何も喋ってないしな」

離反した故か、空也はリヴドを毛嫌いしている。リヴドから来た者達が目の前に現れたなら、文句や挑発の一つでも言いそうなものだ。

加えて、面識のあるアエラと漣の会話に空也が割り込んで来なかったのも不自然だ。アエラが空也を見て何も言わなかったのも同様だ。リヴド側も、離反した空也を毛嫌いしている。

今までは顔を見合わせたら罵倒や侮蔑の言葉を交わすのが普通だった。

「大体時間的に都合が良すぎるんだよ」

ティーンが漣の下を訪れたのが一昨日の夜だ。翌日、つまり昨日の夕方には空也が現れた。今日、まだ昼前だというのにアエラが現れたというのは順番が早過ぎる。

「確かに、少し細工はしたけど、これは早過ぎる」

空也は困惑気味に弁解した。

「何企んでやがった？」

額が触れる寸前まで顔を近づけ、漣は空也を問い質す。

「全部吐かなきゃお前にも地獄を見せるぞ」

「解った、解ったから……！」

うつたえる空也から距離を取り、漣は銭湯前の道路に視線を向けた。

「彩、お前も出て来い」

「……鋭いわね」

驚きの中に少しだけ焦ったような表情を浮かべて、彩が扉の影から姿を現した。

一部始終を見ていたのだろう、漣の態度に冷や汗をかいているように見えた。

「誰がお前を鍛えたと思ってるんだ」

漣の言葉に彩が押し黙る。

「全部、聞かせて貰おうか」

高圧的に、漣は言い放った。

空也と彩は息を呑んで、互いに顔を見合わせていた。

第五章 「反撃と誤算」

第五章 「反撃と誤算」

銭湯横の寝泊りに使っている小屋の中に三人は座っていた。一つしかない畳部屋の中で、小さなテーブルを挟んで漣は二人と向かい合う。椅子はなく、畳の上へ直に腰を下ろしている。何故か、彩と空也は正座だった。

漣の怒りもだいたい静まっていたが、不機嫌そうに腕を組んでいる。「とりあえず、大体の状況は解った」

大きく溜め息を吐いて、漣は情報を整理する。

レグナからリヴドに、宝珠が流れたことが発端だ。今まで半々だった宝珠数のバランスが崩れたのが原因なのだ。同時に、レグナから漣が追放されたために、更に差が開いてしまった。

この事態を受けて、レグナは宝珠を奪還するための策を練ることとなった。

ティーンが漣を連れ戻しに来たのは、足りない戦力を補うためだ。差が開き過ぎたことで、追放した漣を連れ戻そうとしたのだ。だが、レグナの総意ではなく、一部の者達の策に違いない。追放した者を連れ戻して戦力に加えるという行為は、漣を追放した者達にとっては何辱に近い。漣を追放するべきではなかったと言っているようなものだ。

また、宝珠を持つ漣を追放したということは極秘事項だった。特に、敵対世界であるリヴドには情報が漏洩しないようにする必要があったはずだ。ただでさえ宝珠の数という均衡が崩れた上に、漣がないとなればリヴドにとって有利な状況と見て間違いない。

しかし、アエラは漣を追放されたことを知っていた。
原因は空也だ。

空也の思惑は、リヴドの戦力に壊滅的なダメージを与えることだった。だが、空也一人では四賢人を相手に勝てる見込みはゼロに近い。四賢人を突破できなければ、リヴドの戦力を奪うなど不可能だ。四賢人以外にも、リヴドには宝珠の保持者がいるのだから。

ただ、リヴドが優勢な現状で、レグナ側にいる空也にとって厄介なものだった。空也はリヴドとの戦闘において、レグナが優勢になるように尽力してきた。だが、宝珠が流れてしまったことと、レーン・シュライヴという人材の消失が大きな痛手になると考えたのだ。「で、お前の読みだとあの場で俺がアエラを倒してたってところか？」

「まあな」

ばつが悪そうに、空也は漣の言葉を肯定した。

考えた末に空也が出した結論は、ティーンと同じく漣を味方につけることだった。同時に、リヴドに漣の状況を話すことで防衛力を削ぐと考えた。

レグナとリヴド、双方にとって宝珠を完全に扱える人材は極めて重要だ。宝珠自体の力だけでなく、持ち主の知略や力量、精神力が戦力に影響する。宝珠の存在も大きい。それ以上に宝珠を完璧に扱える者の存在は大きい。

実力者の一人である漣が追放されたとなれば、リヴドも放つては置かない。可能なら戦力に加え、断られた場合は宝珠だけでも力づくで奪う。レグナにもリヴドにも加担しない、第三の勢力は極力出すべきではないのだ。状況が混乱しやすくなるだけでなく、いざという時に背中を攻撃されるといふ事態も起こり得るからだ。

もっとも、漣が第三勢力となって攻撃を行うかどうかは別なのだが、二つの世界は漣の意思を抜きに考えている。

空也は、リヴドにレーン・シュライヴがレグナを追放されたと伝え、けしかけたのだ。アエラが攻撃的な態度を取れば、漣は彼女と戦うだろうと踏んで。

空也の予想では漣がアエラを倒し、リヴドの戦力の一角を潰して

いたに違いない。

加えて、アエラが倒されたとなればリヴドは漣の存在を危惧することとなる。故に、他の四賢人が漣の抹殺に乗り出し、リヴドの防衛網は戦力が分散している分だけ脆くなる。

空也はリヴドの戦力や意識の一部が漣に向いている間に、レグナを動かそうと考えたのだ。レグナにとっては宝珠の奪還の、空也にとってはリヴドの戦力排除の、絶好の機会になるはずだから。

漣は溜め息をついた。

肉体的なダメージは皆無に等しいが、アエラの部隊に攻撃してしまったのは変えようのない事実だ。宝珠をよこせという要求も蹴った。アエラにしてみれば漣は敵以外の何者でもないはずだ。

放って置けば、この街で戦うことになる。もし、街が戦場になれば付近の人達は確実に巻き込まれるはずだ。

周辺に住む人達を守りながら、敵を倒すことは極めて難しい。

レグナにいた当時の、自分の部隊を持っていたレーン・シュライヴであれば不可能ではなかったかもしれない。今の漣は一人で戦う以外に手はないのだ。部隊を率いての戦略は不可能だった。大勢を相手に上手く立ち回るためにはかなりの準備を必要とする。

リヴドの者達が漣に時間を与えるとは思えない。味方にならないのであれば、敵になる前に消すというのが組織にとっては一番安全なのだ。レグナ側に加担する前に、漣一人のところを叩きに来ると考えるべきだ。

漣の存在を無視するとは考えられない。

「全く、厄介な状況にしゃがって……」

溜め息混じりに漣は呟いた。

「元はと言えばあなたが原因じゃない」

彩が小さく呟く。

現在の状況の中には、レグナにはレーン・シュライヴという戦力がない、という部分がある。だが彩が言っているのは漣の離脱ではない。漣が離脱した理由について言っているのだ。

「お前もそう思ってるのか？」

彩から視線を空也に移して、漣は問う。

「いや、正直よくわからん。レグナの自業自得かと思ってた」
空也は肩を竦めた。

レグナは漣を追放するべきではなかった、というのが空也の考えなのだろう。物事を深く考えるのが苦手なためか、彩とは全く違う考えだ。

「だって、あなたが亡命なんて手引きするからこうなったんじゃないの！」

彩は強い口調で言い張った。

漣がレグナを追放されたのは、リヴドへの亡命を手助けしたためだ。もつとも、ただの亡命者ならば特に問題はなかった。漣が手助けした亡命者は、宝珠を持っていたのだ。貴重な戦力である宝珠と共に、同じだけの価値がある持ち主をもリヴドへ渡してしまったのである。

本来なら漣は死刑になっていた。

だが、今までの働きや統治組織内部の要望により、死刑を免れた代償として、漣はレグナを追放された。リヴドへは渡されず、第三の世界へと。

「ちゃんと回避策は用意していたはずなんだけどな」

漣は溜め息をついて頭を掻いた。

「回避策？」

「ああ、まあ、複雑だから話すのもめんどい。レグナの四戦司には話してあるから、聞きたかったらそいつらに聞け」

眉根を寄せる彩に、漣は苦笑した。

どうやら、四戦司は漣の提案した回避策を取らなかったようだ。もし、漣の提案を受け入れて実行していれば宝珠の数というバランスは保てたはずだ。バランスが保てなかったからこそ、ティーンは漣を連れ戻しに来たのだろう。

「馬鹿ばかりだな、全く……」

漣は額を押さえて溜め息をついた。

四戦司が漣の提案を呑まなかった理由は察しがつく。提案した時にも四戦司は余り良い顔はしていなかった。漣が亡命者の手助けをした離反者として、提案を呑むことを拒絶したのだ。離反者の提案を呑むことで彼らのプライドが傷付いてしまうから。

可能性としては漣も考えていたが、戦力バランスの維持を優先すると踏んでいたのだ。漣の提案を呑まなければバランスの崩壊が免れないと知った時には、既にチャンスは過ぎていたに違いない。回避策が使えなくなったレグナは、仕方なく漣に接触したのだ。

「これからどうするんだ？」

「お前は？」

空也の言葉に、漣は同じ問いを返した。

「俺は、リヴドと戦う」

迷わずに答えたのは空也だった。

元々、空也の目的はリヴドの戦力を奪うことだ。戦うという選択は既に決まっている。

「私は、あなた次第ね」

対して、彩は自らどうしようという気はないようだ。というよりも、彩は漣や空也と違って単独行動できるだけの地位や意思がないだけだ。

彩はティーンの下だ。追放された漣や、目的のため独自に動いている空也とは違う。彩に与えられた任務は漣の監視と、交渉である。リヴドの部隊が彩を相手に攻撃を仕掛けてきたならば自衛のために戦うという選択肢もある。だが、今リヴドに狙われているのは漣だ。

「で、お前はどうすんだ？」

空也が問う。

彼は漣を頼りにしている。むしろ、漣が味方としてリヴドと戦うと言い出さなければ空也にとっては苦しい状況だ。一人でリヴドの者達を相手にしなければならぬのだ。

「この世界を荒らされたくはないしな」

二人から視線を逸らし、漣は呟いた。すうっと細められた視線に、空也と彩が身震いする。

「打つなら先手だ。後手に回るには時間が無さ過ぎる」

漣の言葉に、空也が口元に笑みを浮かべる。

もしも、準備するだけの時間があつたなら、漣は後手に回っていたかもしれない。相手の出方を予測し、実際の動きを見て、準備したプランの中から適したものを選択する。上手く行けば、先手を打つよりも効率良く敵を殲滅できるからだ。

「言つとくけどな、空也」

微かに怒りを含んだ視線を向けられた空也が肩を震わせた。

「手伝うのは俺じゃない。お前だ」

「仰せのままに」

漣の言葉に、空也は大袈裟に頭を下げる。

「先手を打つって、どうするのよ？」

彩が口を挟んだ。

先手を打つ、ということとは、リヴドへ乗り込むということだ。漣がリヴドへ行くには問題がある。一つは銭湯だが、これは臨時休業を使えば大丈夫だ。だが、もう一つの問題は厄介だ。

リヴドへ行く手段を漣は持っていない。追放された漣が持って来たものは、自分が扱う宝珠ぐらいだ。当然だが、帰り道として使えるようなものは持たされていない。

漣が単身、他の世界へ向かうことはできないのだ。

「空也のを使えばいい」

「あ」

漣の回答に、彩は失念していたとばかりに間抜けな声を出した。

空也は単独で動いてこの世界まで来たのだ。つまり、空也には世界を移動する手段がある。空也の持っている道具を使えば漣も移動が可能だ。

「彩、お前は？」

「監視しろって言われたんだから、ついていくわよ」
「少しだけ面倒臭そうに、彩は答えた。」

漣についてくるとなれば、戦うことになるが、承知の上なのだろう。一応、レグナの間人にとってリヴドは敵だ。戦うことに問題はない。

「決まりだな。直ぐに行くぞ」

「正気で言ってるの？」

「こういう時は時間が経てば立つほど不利になる」

呆れたような口調の彩に、漣は立ち上がりながら告げた。

準備する時間があるのなら、急ぐことはない。準備の時間も、用意もないからこそ素早く動く必要があった。

「空也、近くの山頂で合流だ。今直ぐに準備しろ」

「おう」

漣の指示に、空也は従った。どこか嬉しそうな表情を見せる空也を視線で牽制し、漣は部屋を出る。

「ちよ、ちよっと！」

「今直ぐ行くのが嫌なら残れ。銭湯を閉めたら直ぐに向かう。用があるならそれまでに済ませろ」

問答無用で彩に言い放ち、漣は小屋を出た。

朝の間に準備をしていた銭湯の各設備を、全て休業時のものへと変えていく。お湯の処理を済ませ、入り口の戸に鍵をかける。臨時休業と書き記した札を戸に貼り付けると、銭湯を後にした。

少々時間がかかったが、彩が用事を済ませるには十分だ。

銭湯を運営している漣と違い、彩はアルバイトとして商店街に滞在している。もし、彩が今後も漣の監視を続けるならば無断で欠勤して職を失うのはまずい。最悪、漣が彩を雇ってやる気もあるが、彼女が拒否しているのだから仕方がない。今日は欠勤する旨を伝えてから合流地点へ向かうはずだ。

漣は山道を歩きながら、街を見下ろした。

追放されて転送された場所が、この山だった。標高はさほど高く

なく、登山というほどのものではない。むしろ、ハイキングやピクニックなどが似合う。

「ごちゃごちゃした街並みの中に、漣の視界を横一直線に、やや大きめの通りが伸びている。大通りに面した銭湯と商店街がはっきり見えた。」

「佐久間さんには何て言おうかなあ」

漣は溜め息をついた。

明確に、漣が異世界の人間だったとは言われていない。ただ、漣の過去に何らかの問題があるのだと、佐久間も気付いただろう。漣がこの世界で暮らしていくためには、異世界の人間だと明かすべきではない。どう言い訳するかが問題だった。

「ったく」

毒づいて、漣は舌打ちをした。

リウドへ行ったら思いつきり暴れてやろう。漣の生活を乱したことを後悔するぐらい、リウドを痛め付けてやる。口元に凶悪な笑みを浮かべ、漣は山頂へ続く道を歩いていった。

「遅いぞ、漣」

「うるせえ」

文句を言う空也に言い放ち、漣は周囲を見回した。

見晴らしのいい山頂から、街並みが見える。木々は中央にはなく、少し離れた場所に生えている。見晴らしの良さを考えて整備されているに違いない。

空也の隣には彩が立っていた。不機嫌そうな表情は相変わらずだ。「行くぞ、門を開け」

頼む、とは決して言わない漣に空也は少しつまらなさそうに頷いた。

両手に球形の結晶を掲げ、空也は腕を大きく左右へ開く。極彩色の光を内包した結晶は絶え間なく内部で流動し、輝いていた。

「異相同期開始……接続……完了！」

空也の言葉と意思に呼応するかのよう、極彩色の光が流れの向

きを変える。結晶の周囲が淡く、内部と同じ輝きに包まれる。輝きは光の帯となつて、空也の目の前の空間に渦を描き出した。外縁部が円を描いたところで、渦の中央から暗闇が溢れ出す。円の内部を闇が満たし、空也が漣に視線を向けた。

異世界同士を繋ぐ門だ。世界という概念の外郭に穴を開け、他の世界へと繋げる。

空也が使用した移界珠は、携帯できる数少ない転送用の宝珠だ。恐らくは無断で持ち出してきたのだろう。レグナの統治組織が空也の単独行動のために移界珠を貸し出すとは思えない。

「ねえ、本当に行くの？」

彩が不安そうな表情を見せる。

四戦司や四賢人に匹敵する実力者である漣と空也はともかく、彩は敵の本国へ攻め込むという行為に不安を感じている。自分の実力に不安があるから、無謀なことのように思えているのだ。

「嫌なら残つてもいいんだぞ？」

漣の本心だった。

命を落とす可能性も十分にある。漣と空也も同じだ。むしろ、数を考えれば圧倒的にリヴドの方に利がある。彩一人だけを考えるなら、死に行くようなものだ。

漣と空也には命を懸けてでも戦う覚悟がある。

「行くわよ。私は監視してなきゃいけないんだから」

不機嫌そうに彩は言った。

宝珠によつて開かれたゲートへ、漣は足を踏み出した。漣に続いて彩がゲートを潜り、最後に空也が動く。

一瞬の意識の途絶の後、暗転した視界が元に戻る。

禍々しい紫色の空と、紺色の大地が目に入った。漣にはいつ見ても慣れない景色だ。この地で暮らしていた者にとっては当然のものでも、他の世界に暮らす者から見れば異様な光景だ。

少し遠くに、四つの塔に囲まれた城のある街が見える。

ただ、色彩は少しくすんでいる。宝珠や、擬似宝珠を大量に使用

した戦闘によって、世界全体の環境破壊が進んでいるのだ。

宝珠が秘めたエネルギーは、周囲、つまり世界から供給されている。使用すればするほどに、世界のエネルギーが奪われていく。無論、世界という枠が持つエネルギーは、宝珠から放たれたものを吸収することで自然に回復していくものだ。問題は、自然に回復する速度が極めて遅い、という点だ。

今は戦いが極力抑えられているが、激戦が繰り広げられ続けたら景色は加速度的に褪せていくだろう。

戦うことで環境破壊が進むのだ。

漣が戦うことを拒む理由の一つでもある。漣が追放された第三の世界の景色は美しい。澄み渡った青い空と、緑の大地は眺めていて気分が良い。

景色を損ないたくない。だから、思い切り戦うのを避けた。

そもそも、レグナとリヴドと違い、宝珠の無い世界でもあるのだ。勝手に巻き込むべきではない。

漣がリヴドに乗り込んだのも、宝珠の力を存分に使って戦うためでもある。リヴドで戦うことで、第三世界の環境破壊を防ぐつもりだった。

「少しだけ、レーンに戻るか」

小さく笑みを浮かべて、漣は呟いた。

リヴドの連中に、佐久間や美咲達に親しまれている漣という名で呼んで欲しくない。

「ん、出て来たな」

クーヤが呟いた。

前方の、街の方から大勢の兵士達が走ってくるのが見えた。

「どうするの？」

「最初から全力で叩き潰す」

サイの問いに答え、レーンは口の端を吊り上げた。

「おっしや、やるか！」

クーヤは乗り気だ。元々、こうなることを望んでいたのだから当

然だが。

移界珠をズボンのポケットにしまい、代わりに、上着の内側から首飾りを引つ張り出す。真紅の宝珠が取り付けられた首飾りを外し、クーヤは右手に巻きつける。掌を開いても、手から離れぬように。身に付け、肌に触れてさえいれば宝珠の力を使役することは可能だ。だが、触れている面積が多ければ多いほど、宝珠の力は操りやすく、より強力なものとなる。

真紅の宝珠の中で、光が炎のように揺らめき、流動する。次の瞬間にはクーヤの右手が炎に包まれていた。発動させた宝珠に触れている者という影響で、今のクーヤは熱の影響を受けない。

燃え盛る炎を振り撒くように、クーヤは右手を水平に薙ぎ払う。

クーヤの意思に呼応し、炎は彼の思い通りの位置へと振り撒かれた。火柱が立ち昇り、リヴドの戦士達が十数人ほど飲み込まれた。

立ち昇る炎は陽炎で大気を揺らし、熱気を嵐のように振り撒く。赤々と燃え盛る火柱を、クーヤを右手をかざすだけで鎮めて見せた。

「さすが、フロミネンス紅炎ね……」

息を呑んで、サイが呟いた。

炎を司る宝珠『こくえん刻焰』を操るクーヤを差した代名詞だ。攻撃的な性格も相まって、クーヤの攻撃は熾烈を極める。弱い者は容赦なく炎に呑み込まれ、骨すらも残さずに蒸発する。

「大技使ってる割にはあんまり巻き込めてないな」

「半分は威嚇と、挑発だ」

レーンの言葉に、クーヤは笑みを浮かべて見せる。

四賢人を出せと言外に含ませているつもりなのだ。

レーンの胸の中央が熱くなる。熱量が身体の中を駆け巡り、力を吐き出す場所を求めている。漣は、力の流れに意思を加え、任意の場所へと解き放った。

炎に阻まれ、回り込もうとしていた者達のほとんどが急に動きを止める。急に金縛りにあったように、誰も動かない。だが、やがて全員の身体が小刻みに震え始める。得体の知れないものを見たよう

な恐怖に表情が歪んでいくのが見えた。

レーンは指を鳴らした。

途端に、全員が白目を剥いて崩れ落ちた。

「ミラージュ 屋気楼……！」

兵士達とは別の方向から、声が聞こえた。

屋気楼というのは、レーンの二つ名だ。レーンが操る宝珠『こくえい 幻影』は幻影を司る。相手の精神に力を作用させ、使用者の望むままに幻を投影させるのだ。投影される本人にとっては、幻とは思えない現実感を伴って。

視線を向ければ、アエラが立っていた。隣に人影を従えて。

長身痩躯な男が一人、四賢人だ。長身痩躯な男、レーカは薄手のジャケットのようなものを着込んでいる。短髪で、視線は冷たく、鋭い。

「説得に成功したようだな、サイ」

不意に背後から声が聞こえた。

クーヤは驚いたように振り返り、サイも背後を見て目を見開いた。レーンだけは、溜め息をつく。

ティーンと、他に女が一人立っている。こちらもレグナの四戦司の一人だ。前髪だけが長い銀髪の女性で、名をレイヴィアと言う。リヴドと違い、レグナの戦士は皆、同じ白いロングコートのような制服の着用が義務付けられている。

四賢人と違い、こちらは全員が同じ服装で統一されていた。後方には部下達が見える。かなりの大部隊を引き連れてきたようだ。

「加勢か？」

何故か返答に困っているサイを他所に、クーヤは小さく呟いた。状況を考えれば、四戦司の登場は心強い味方に思える。リヴドと敵対するという今の構図は、レグナ側に見ると見るに十分なものから。

しかし、ティーンが微かに眉根を寄せた。

「いや、クーヤ、お前は反逆者としてこの場で処刑する」

ファド ミラージュ・レーン

放たれた言葉に、クーヤは絶句した。
ただ、レーンだけは、大きく溜め息をついていた。

第六章 「帰る場所」

第六章 「帰る場所」

「どういうことだよ！」

クーヤが叫んだ。

「我々の作戦も知らずに勝手に動き回られては困る」

ティーンが告げる。

「やっぱりこうなったか」

レーンは苦笑した。

「なんだと！ お前知ってたのか！」

噛み付くように迫るクーヤに、レーンは渋い顔をしてみせた。

「お前、本当に馬鹿だな」

言って、レーンはティーンとアエラに視線を向けた。クーヤに説明するだけの時間をくれるかどうか、確認のために。ティーンは小さく溜め息を漏らし、アエラは肩を竦める。

「どうやら、何も理解できていないのはクーヤとサイだけのようだ。一般の兵士は除いて、だが。」

「お前さ、ティーンが俺に接触するのを知ってて、リヴドに情報流したんだろ？」

「ああ」

「じゃあ、ティーンの動きはリヴドも把握したことになるよな？」

「それが？」

「俺が追放されて、ティーンが連れ戻しに接触するって言ったら、レグナは戦力の再編にかかっているってことだろ？ それも、一度は追放した俺を連れ戻そうとするほど急いで」

クーヤの視線がレーンから外れた。やや呆然と、アエラを見て、次にティーンに視線を向ける。

追放し、手放したはずのレーン・シユライヴという戦力を再び取り込もうとするということは、レグナは勢力の建て直しを図っていると見て間違いない。レグナが密かに戦力の再編を急ぐということは、リヴドに襲撃する準備と考えることができる。

特に、レーンの追放はレグナでは重要機密だったはずだ。レーンという戦力の喪失をリヴドに知られては、レグナの戦力が激減していると言するようなものだ。もし、戦力が低下していることを知られてしまえば、リヴドがレグナを襲撃する可能性は高い。軍備の再編が完了する前に攻撃を仕掛ければ、一気に叩き潰せるかもしれないから。

レーンが援助した亡命者の存在によって、戦力が増しているリヴドなら、なおさら可能性は高い。

「お前のせいで、本国が襲撃されているんだ」
ティーンが告げた。

「あ、人数少ないのはやっぱりそれが原因か」

レーンは溜め息混じりに笑った。

四賢人の残り二人は部下を引き連れてレグナに向かったのだ。レグナでは四戦司のうちの二人が応戦しているところか。故に、レーンの前にいる四賢人はアエラとレーカだけで、四戦司はティーンとレイヴィアだけなのだ。

「でも、レグナには何も話していないはずじゃないか……！」

「だから馬鹿だっつってんだよ。サイがいるだろ？ こいつが直属の隊長に報告しないわけがないだろ」

クーヤの言葉を、レーンは一蹴した。

サイはレーンの監視を言い渡されていた。レーンが戦うとなれば、サイは直属の上司であるティーンに報告するはずだ。

「お前、一手先ぐらいしか読んでないだろ？」

レーンの言葉に、クーヤは何も言えずに視線を逸らした。

「策略つてのはさ、二手、三手先以上を読んでおかないといけないんだぜ？」

恐らく、クーヤ自身は読んだはずだったのだろう。だが、視野が狭すぎたのだ。リヴドとレーンの動きだけを見すぎて、レグナの情勢を忘れていた。いや、クーヤの中では、最終的にはレグナにも有効な状況になる予定だったに違いない。

「最悪の事態を予測して、それを避けつつ、自分の望む方向にしか進ませないようにするのが策略つてもんだ」

レーンの言葉に、ティーンもアエラも黙ったままだった。

追放される前はレーンの策略に何度も苦しんできたのがアエラであり、助けられてきたのがティーンだった。

銭湯のカメラの配置も、レーンの知略があつてこそその配置だ。最悪の事態を考え、どうしたら見つかるか、どういう状況でバレるか徹底的に考える。考えが纏まったら、最悪の事態にならぬような状況へと変えていくのだ。

「くそっ……」

クーヤが毒づいた。自分の浅はかさを知ったらしく、肩を落としている。彼にとっては、帰る場所はレグナしかないのだ。リヴドにはもうクーヤの居場所はない。

「さあ、敵を殲滅しようか、レーン」

笑みを浮かべるティーンを見て、レーンは大袈裟に溜め息をついて見せた。

「あのさ、ティーン、言つとくけどさ」

レーンはわざとゆっくり言葉を紡いだ。

「そもそも、俺の生活を乱したのはお前だからな？」

「レーン？」

不機嫌そうに表情を歪めるレーンに、ティーンが目を見開いた。

「お前が俺に接触するとか考案しなけりゃ、クーヤも動かなかつたんじゃないか？」

「まさか、お前、最初から……！」

「俺、お前らも潰すから」

頬を引き攣らせるティーンに、レーンは冷たく言い放った。褪め

た視線で、ティーンを射抜く。

ティーン達だけでなく、アエラ達も息を呑んでいた。

レーンは最初から事態を予測していた。リヴドへ来る際にわざわざ、監視役のサイに時間を与えたのも、ティーン達を呼び寄せるためだ。そうでなければ、サイに時間を与えてティーン達を呼ぶ必要はない。レーン個人はティーンを味方として扱えるが、クーヤがいることを考えたら難しい。

実際、ティーンはレーンとの共闘は求めたが、クーヤは抹殺すると言い出した。確かにクーヤは身勝手だが、ティーンよりもレーンのことを解っている友人だ。無論、初めからティーンを仲間と見做す気はなかったのだが。

「俺の平穏な生活を乱した罪は重い」

ぎろりと、レーンはアエラ達へと視線を向ける。殺気と憎悪、怨恨の籠った視線にアエラが身震いする。

「サイ、お前は どうする？」

「え……？」

急に名前を呼ばれ、サイは焦ったように一歩、後退した。

「もし、レグナとリヴドのどっちかに加担したらこうなると思え」
言ってレーンは右手を上げる。

途端に、ティーンが連れて来たであろう部下の一人が白目を剥き、泡を吹いて昏倒した。更に、全身に痙攣まで起こしている。慌てて傍にいた仲間が駆け寄るが、レーンの力を受けた部下は一瞬大きく身を仰け反らせるように跳ね、沈静化した。彼の首筋に手を当てた部下の顔が青褪める。

死んでいたのだ。ショック死である。

「ひっ……」

誰かが小さく悲鳴を上げ、部下達が大きく後退する。

「ま、昔の教え子だし、半殺しぐらいにしといてやってもいいけどな」

凄惨な笑みを浮かべるレーンに、サイが喉を鳴らした。

彼女は、まだ見習いの頃、レーンの下についていた。だから、レーンの恐ろしさは人一倍知っている。きっと、彼女にレーンと戦う意思はない。

落ち込んでいたクーヤも、レーンの表情に身を退いていた。

「クーヤ、とりあえずお前は好きなように暴れる。俺も本気で行くから」

笑みを浮かべるレーンに、クーヤは頷いた。

「正気か、レーン！」

「言っただろ、お前は俺の生活を乱したんだ。すげえ腹立ってんだぜ？」

身構えるティーンに、レーンは笑って見せた。怒りで引き攣ったレーンの笑いに、ティーンの様子が険しくなる。

背後で炎が燃え上がった。クーヤが戦闘を始めたのだ。凄まじい熱気と明かりを背に、レーンは息を細く吐き出した。

「行くぞ、ティーン」

レーンの姿が霞み、消失する。

同時に、ティーンの周囲に複数人数のレーンが現れた。

「レーンッ！」

歯噛みし、ティーンの周囲に風が巻き起こる。紺色の砂が渦を巻き、ティーンは風を纏った。彼の持つ宝珠は『刻風』だ。風を司る力を秘めた、強力な宝珠である。

三人のレーンがティーンへと突撃していく。ティーンは風を腕に集中させ、レーンへと振るった。濃密な大気の流れは切断力を発揮し、三人のレーン全てを切り裂いた。

だが、切り裂かれたレーンは全て漆黒の影となり、霧散する。

舌打ちするティーンの後方から、レーンが蹴りを浴びせた。前方へと体勢を崩すティーンへ、横合いに現れた別のレーンが回し蹴りを放つ。

「くっ！」

呻き、ティーンは蹴りを腕で受け止めた。足を受け止めたままの

ティーンに、更に別のレーンが拳を振るう。空いている手で拳を受け止めたティーンの目の前に、笑みを浮かべたレーンが現れる。

ティーンのように、宝珠を使いこなせる人間にはレーンの『刻影』は効果が薄い。宝珠の力とはいえ、幻は幻でしかない。強い精神力の持ち主には破られてしまうのだ。

単なる道具でしかない宝珠では、幻を投影して精神を支配下に置くことしかできない。レーンの『刻影』には、物理的な攻撃力というものが圧倒的に不足していた。

だから、漣は宝珠を自分の身体の一部へ変えた。自らの体内に宝珠を取り込み、己の身体の一部へ。身体の一部となった『刻影』は、漣の存在を通して、物理的な力を得た。

故に、『刻影』が作り出す幻は全て本物と同じ質量と感触を持ち、ダメージを受けると漆黒の粒子となって分解する。

レーンが四戦司や四賢人と張り合えるのは、宝珠を身体の一部としたためだ。

先ほど、レーンが命を奪ったティーンの部下は、『刻影』による幻でショック死しただけだ。自らの身体が致命的なダメージを受ける幻を見て、精神が死を引き起こしたのである。レーンが本気で力を引き出した幻は、他の人間にも見る事ができる。

「予想外だったからって、だらしないわよティーン」

笑みを浮かべたレーンの胸に、槍が生えた。背後から長槍で貫かれたレーンが影となって崩れ去る。

「私には不得手なんだから、あなたがしつかりしなさいよ」

レイヴィアだ。彼女の手に、長槍が握られていた。レーンを貫いた槍は直ぐに霞むように消えた。同時に、レイヴィアの両手に刃の腹の部分が前面に押し出されるように湾曲した剣、ショーテルが現れる。

彼女の宝珠『刻矛』^{こくむ}の力だ。レイヴィアは刃によって攻撃を行う全ての武器を作り出すことが可能だった。幻による攻撃を特性とするレーンには不向きな力だ。

「そうだな……」

ティーンは息を吸い、気分を入れ替えたようだった。彼が纏う風の密度が一気に増した。さながら、竜巻の中に立っているような光景だ。

風は厄介だ。流れが視認できず、あらゆる方向へと攻撃ができる。加えて、世界を満たす大気の流れを動かすティーンの宝珠の破壊力は決して低くない。

レーンも、気を引き締めた。

本気の四戦司を相手に、遊んではいられない。生き残らなければならぬ。どんな手を使っても。

「じゃないと、俺の信頼ガタ落ちだ」

苦笑を浮かべ、レーンは小さく呟いた。

レーンが命を落としたら、銭湯の機器を管理できない。バテてしまつたら、レーンの信頼は間違いなく失墜する。死んでいるのだから関係ない、とは思わなかった。

むしろ、レーンは女体の神秘をこれからも見たいのだ。

「……死ねるか！」

瞬間、レーンの中でスイッチが入った。

*

クーヤにとっての目標は何か達成したと言える。レーンという戦力を加えて、リヴドと戦うという思惑自体は上手くいった。

だが、クーヤはレグナを敵に回してしまふとは考えていなかった。レーンの言うような部分まで考えが及ばなかったのだ。最終的にはレグナ側に有利な状況となるはずだった。

レーンの情報を流し、リヴドに接触させる。レーンが応戦していればリヴドも彼を放って置くことはできず、宝珠の問題からも四賢人が攻撃を仕掛けていくはずだ。レーンが四賢人を相手に戦うとなれば、リヴド本国の防御が手薄になる。クーヤは脆くなった防衛網

をレグナの部隊と共に突破し、リヴドの戦力を奪うつもりだったのだ。

クーヤは炎を身に纏っていた。

「どうすっかな、これから」

敵を前に、クーヤは呟く。

レグナが切り捨てたということとは、もうクーヤに帰る場所はない。唯一、誰かに与えられた居場所だったというのに。

宝珠を手にした瞬間、クーヤは家を失った。リヴドの戦力とならなければ、クーヤに居場所はなかった。だから、クーヤは自分の居場所を勝ち取るために戦い続けていた。

四賢人達との意見の食い違いと、自らの存在が最初から仕組まれていたものと知った時、クーヤはリヴドから離反した。宝珠を手にしたクーヤは、リヴドの戦力となるべく動かされていたただけだったのだ。

離反したクーヤを、レーンはいとも簡単に受け入れてくれた。余り良い顔をしないレグナの者達を容易く言い包め、強制も誘導もせずにクーヤの居場所を用意してくれたのだ。

無言で、レーカが歩み出た。

彼の周囲の空気が白く変化する。冷たい風がクーヤの頬を撫でた。レーカが操る宝珠『刻冷』は、冷気を司る。熱量という部分では同じだが、クーヤとはベクトルが正反対な力だ。

「そうだな、今はお前らを潰すことだけを考えよう」

クーヤは静かに呟いた。

今は悲観的になっっている場合ではない。自ら招いた事態でもある。思い悩み、後悔するのは戦いを終えてからでいい。

クーヤがなすべきことは、自分の思うままに力を振るい、敵を捻じ伏せることだ。

「おおおお つー!」

雄叫びを上げ、クーヤは地面を蹴った。

足元が爆ぜ、クーヤの身体を前面へと押し出し、加速させる。炎

の壁を引き連れて、クーヤはアエラとレーカへと足を進める。熱気がクーヤの金髪を照らし、揺らす。

左から右へと腕を振り払った。五メートル程度の距離を開けて、地面から火柱が立ち昇る。熱風が周囲に吹き荒れ、アエラ腕で顔を庇った。レーカの周囲には冷やされた大気が霧を作り出し、火柱の熱量を遮断している。腕の動きに遅れて、火柱が移動するかのよう

に連続で立ち昇った。
アエラが後方へと跳んだ。一瞬にして数メートルの距離を移動し、身構えている。

彼女の持つ宝珠は『刻瞬』^{いしゆん}と言い、速度を司るものだ。故に、自身の身体を高速で移動させることができる。人間の認識力の限界を超えた速度にも、持ち主ならば影響はない。

対して、レーカは火柱に飲み込まれた。

刹那、爆音が響き渡る。

火柱の熱量と、冷気が互いに打ち消しあい、水蒸気爆発を起こしたのだ。レーカは、爆発で破壊力となるエネルギーを消費させ、クーヤの攻撃を防いだのである。

「さよなら、クーヤ」

耳元で声が聞こえた。

一瞬のうちに背後へと移動していたアエラが、クーヤの背中に回し蹴りを叩き込んだ。

意識が飛ぶような衝撃がクーヤの身体を突き抜ける。視界に火花が散ったようだった。

反応し切れず、クーヤの身体が宙を舞う。加速された蹴りはクーヤの身体を十メートル以上吹き飛ばしていた。地面に接触する瞬間に、クーヤは身体の表面で爆発を起こす。接触の衝撃を相殺すると同時に身体を浮かせ、足から着地する。

「そいつは俺のセリフだ」

膝をついた体勢で、クーヤは呟いた。

蹴飛ばされた背中が痛む。骨に罫が入ったかもしれない。

冷えた風がクーヤの首筋に触れる。

振り返ったクーヤの目に入ったのは、氷の剣を手にしたレーカの姿だった。刀身は、クーヤの首筋に添えられている。レーカの視線は、一切の感情がない、冷たいものだった。

死ぬのか。

頭に浮かんだ言葉に、クーヤの奥で何かが弾ける。恐怖や怨恨といった感情ではない。もっと、純粋な思いだった。ただ、生きたいと、もっと楽しい思いをしたいと、思った。今までの辛く、苦しい人生のまま幕を下ろすのが、どうしても嫌だった。

クーヤは右手の宝珠を強く握り締めた。

溢れ出す力が、クーヤの周囲に莫大な熱量を解き放つ。クーヤ自身の右手の炎は白熱し、触れた地面をも溶かし始めていた。

クーヤの周囲に解き放たれた熱量はレーカを直撃する。氷の刃を一瞬で蒸発させ、レーカ自身の体力をも一気に奪う。初めて驚いたような表情を見せ、レーカが後方へと飛び退く。

「ああああ ツ！」

クーヤは腹の底から叫んだ。思い切り、自分の闘争心を吐き出す。クーヤの身体を白熱した炎が包み、背後から攻撃しようと移動してきたアエラを熱風で吹き飛ばした。

氷点下の大気に身を包んで突撃してくるレーカに、クーヤは真っ向からぶつかって行く。クーヤは宝珠を握り締めた右の拳で、レーカの顔を殴り付けた。

絶対零度に近い大気の防壁を貫き、クーヤの拳がレーカを直撃する。周囲に水蒸気が破裂する爆音が立て続けに響き渡る。クーヤの拳は、レーカの頭を飲み込み、蒸発させた。

「お前……」

頭部を失った人の亡骸の手から、宝珠が零れた。レーカの遺体が崩れ落ちる。クーヤは、落下していく宝珠を受け止めていた。

何故、手加減したのか。

疑問は声にならなかった。レーカは、確かにクーヤを殺せたはず

だ。首筋へ刃をあてて止めずに振り切ってしまうえば、クーヤの首は落ちていた。

何の感情もない、冷たい視線は何だったのか。
噛み締めた奥歯が音を立てた。

振り返ったクーヤの前に、距離を置いてアエラが立っている。

「アエラ、お前に一つだけ言っておきたいことがある」

クーヤは言葉を投げる。

レーカの死で、頭が冷えていた。相変わらず、炎は白く光を放ち続けている。ただ、クーヤの心は落ち着きつつあった。

「なに？」

「ずっと前から、そのでかい胸が嫌いだった」

「なッ……!!」

クーヤの言葉に、アエラは絶句する。

刹那、クーヤの炎がアエラを取り囲んでいた。上下左右、全ての方向から。

「クーヤ、あんたまさか……!!」

「あばよ」

冷たく言い放ち、クーヤは右手を水平に薙いだ。

炎はアエラへと収束し、彼女の存在を焼き尽くす。白熱した熱量は一瞬で人間の身体を蒸発させ、消し去った。

「わりいな、アエラ」

隙を見せる方が悪いとでも言いたげに、クーヤは呟いた。

アエラの力は厄介だった。一瞬で立ち位置を変えることのできる力は、人間には視認が極めて難しい。気配を読もうにも、移動速度が上昇しているために、気配も一瞬で動いたようにか感じ取れない。動きを封じるには、全方向から攻撃せねばならなかった。

隙を作り出すという策を考え付いたのは、レーカの死で頭が冷えたためだろう。

あのまま、力任せに戦っていたらどうなっていたか、判らない。

「まだ、あのディスク見てねえんだ」

場違いな言葉を呟いて、クーヤは燃えずに残った宝珠を拾い上げた。

何故、今になってこんなことを思い出したのだろうか。

「やっぱ、楽しかったんだよね……」

クーヤは小さく溜め息をついた。

銭湯で過ごした、一日にも満たない時間が、クーヤにはとてつもなく楽しかったのだ。だから、強く心に残った。また、あの場所で笑いたいと思えた。

どこか、レーンの冷静さに助けられたような気がした。

*

レーンは自分の幻と相手の幻を立て続けに発生させていた。

互いに戦い合うレーンとティーン、レイヴィアの三人を至る所に配置する。自分の位置しか把握できなくなるほどに、大量に。

「レーンッ！」

ティーンが叫ぶ。

「お前、俺が用意しておいた回避策使わなかったんだよね？」

「罪人の提案など受けるものか！」

「プライドと、レグナの勢力と、どっちが大切なんだよ？」

「何が言いたい？」

「いや、別に。俺にはどっちも全然いらねえし」

イラつくティーンを嘲笑い、レーンは敵を翻弄する。

「ま、せつかく俺がバランス調整しておいてやったのにな」

「何だと？」

レーンの言葉に、ティーンが苛立った声を返す。どこにレーンがいるのか判らないため、常に周囲に気を配っている。レーンは彼の動きを真似て、幻のティーンにも投影させた。

言葉を交わすティーンとは対照的に、レーンだけを攻撃し続けているレイヴィアの動きも真似る。幻のレイヴィアが幻影のティーン

へ攻撃を始めた。

「やっぱり気付いてねえのか。なあ、今確認されてる宝珠って、偶数だろ？」

レーンの言葉に、ティーンは愕然と目を見開いた。一度だけ、喉を鳴らして唾を飲み込む。

レグナとリヴドで確認されている宝珠の数は、偶数だ。

もし、レーンが追放されたとなれば、残る宝珠は奇数になる。これでは、レグナとリヴドに宝珠が均等には行き渡らない。結果として、はみ出した一つの宝珠を取り合う形になる。

レーンが用意した回避策は、両者のバランスが均等になるようにするものだった。だが、奇数のものを二つの世界で均等に分けることはできない。

「はみ出た分は、俺が持つてるんだな、これが」
レーンの口の端がつり上がる。

奇数になっていいるのなら、偶数にすればいい。レーンは、はみ出るだろう一つの宝珠を密かに持ち出していたのだ。

故に、レグナとリヴドに残された宝珠は偶数になる。偶数なら、均等に分割できるはずだ。均等に分散されたなら、バランスは保てる。

「つーわけで、そろそろ苦しんで貰うぜ」
喉を鳴らして、レーンは笑った。

レーンが左手に宝珠を取り出す。レーンが持ち出した宝珠『刻光』こくこうは光を司る。光が関わるありとあらゆる事象を操り、支配下に置く力だ。

「キサマ……！」
ティーンもレイヴィアも目を閉ざす。

光を視認せぬように、との考えなのだろうが、甘い。光の一部は眼を透過する。目を閉ざした程度で無効化は不可能だ。

レーンは光を操り、ティーンとレイヴィアの視覚神経を刺激する。『刻影』の幻をより現実的に認識できるよう、『刻光』の力を媒介

にして彼らに直接流し込んだ。

「精神掌握」

レーンの呟きと同時に、ティーンとレイヴィアの動きが止まった。彼らの精神と、肉体を切り離したのだ。いや、彼らの精神には思い通りに身体が動いているという幻を投影しているに過ぎない。実際には肉体にまで脳の指示が届かないだけで。

「どんなものにも、光と影がある」

掌握したティーンとレイヴィアの中に、彼らの心の闇を投げ入れる。

彼らが自分自身で最も恐ろしいと思うものが、目の前に現れているはずだ。並の人間ならこの時点で発狂しているが、レーンの力を知っている上に、自らも宝珠を扱う二人はまだ耐えている。

「崩壊」

レーンが告げる。

左手の『刻光』を突き出し、右手は胸にあてる。

ティーン達の身体の間を戻し、光によるダメージを全身にぶつける。微弱な物理的エネルギーしか持たない光だが、『刻影』の力と併用すれば破壊力は高めることができる。

レーンの身体の一部となった宝珠『刻影』によって精神に与えられたダメージは、肉体にフィードバックされる。生じた傷を光で刺激し、感じるダメージを幻によって精神的な部分で増幅させる。これを繰り返すことでレーンの望むままに相手の身体を痛め付けることができるのだ。

ティーンの右腕が砂のように崩れ落ちる。

突然のことに、ティーン表情が歪んだ。ティーンはただ呆然とぼろぼろと崩れ落ちていく自らの身体に目を見開いていた。

「女性を殺したくはないけど、相手が相手だからなあ」

レーンは哀しげに呟いた。

溜め息混じりに、レイヴィアを見つめる。彼女は、レーンを睨み返していた。

レーンは一筋の閃光を放ち、レイヴィアの額を射抜いた。倒れるレイヴィアに目を伏せ、レーンは溜め息をつく。

精神に干渉する『刻影』は、生物に対して凄まじいまでの効果を発揮する。特に、自我という理性を持つ人間に対して、精神干渉は様々な効力を発揮する。他者を鼓舞し、潜在能力を解放することもできれば、逆も然り。レーンの攻撃を完全に防げる宝珠は一つか二つしかない。故に、レーンは恐れられていたのだ。

振り返れば、クーヤとサイが立っていた。レーンの戦いを目の当たりにしたサイは、言葉を失っている。クーヤは、目を伏せていた。「とりあえず終わったな」

レーンは溜め息混じりに呟いた。
今まで避けてきた戦いを行ったことで、いつものような笑みを浮かべることができない。

精神に干渉して相手の命を奪う『刻影』を、レーンはあまり好んでいない。どうしても、酷な戦い方になってしまいうから。

「帰るぞ、空也」

レーンの言葉に、クーヤが伏せていた顔を上げた。

「行くアテがないならうちで働け。お前に頼みたい仕事がある」

「……いいのか？」

「愛称は太郎だけだな」

「いつか殺す」

クーヤがぼつりと呟いた。

「やれるものならやってみる」

レーンは口元に笑みを浮かべる。

ようやく、笑えた。

サイは、どこか羨ましそうに二人のやりとりを眺めていた。

エピローグ 「新しき日常へ」

エピローグ 「新しき日常へ」

休日の午前十時頃、漣は番台で新聞を広げていた。何か面白い記事はないかと探していると、知っている名前を見つけた。

記事の見出しには『警察官が盗撮！』とある。逮捕された警察官は、漣から盗撮映像を記録したディスクを買っていた堀田だった。

「げ、あいつ捕まったのか」

思わず、漣は渋い顔をする。

「また新しい金づる探さないとなあ……」

漣は溜め息をつく。

堀田が盗撮していたことになっており、漣に繋がる部分は一切なかった。安心すると同時に、残念な気持ち広がる。大切な資金源の一つが消えてしまったのだ。

だが、過ぎたことをどうこう言っても仕方がない。漣は携帯ゲーム機を取り出して電源を入れた。

穏やかな時間に至福のひと時を感じていると、いきなり銭湯に数人の人達が押し寄せてきた。

「大変だよ漣！」

先頭にいた美咲が番台に縋りつくようにして漣を見上げる。

美咲の後ろには妹の香澄や、佐久間を初めとした付近の人達が見受けられる。中に彩を確認して、漣は少し驚いた。彼女も困ったような表情を見せていたからだ。

「どうしたんだ？」

漣は美咲に問う。

「大通りの突き当たりに、大型のデパートができるんだって！」

「デパート？」

「商店街としてはそういうのがあると大変なんだよ！」
目を丸くする漣い、美咲が言う。

美咲は商店街の中の家の娘だ。自宅の家計にも問題が生じるとなれば美咲も落ち着いていられない。

「今、組み合いの人が担当者と話し合いしてたんだけど、ちょっとやばそうなんだよ」

「オーケー、事情は解った。任せろ」

美咲に頷き、漣はゲームの電源を切って立ち上がった。

「おい、ちよつと留守番頼むわ」

男湯の脱衣所の整理をしている空也を呼び、漣は外へ出た。

唇を舐め、漣は一度自宅の小屋へと足を運び、上着と、必要になりそうなものを持って商店街の道路へと飛び出した。

レグナとリヴドとの一件以来、空也は漣のところでは居候になっている。番台に立つのは主に漣で、空也は湯の温度調整を頼んでいる。人の多い時間帯には時折、宝珠の力を使って燃費を稼いでいた。宝珠、つまり空也の意思の通った炎はただ燃料を使って湯を温めるよりも保温効果があり、銭湯の評判は更に向上した。

前の戦いで使用者のいなくなった四つの宝珠は、漣が保管している。宝珠を持つていけばレグナやリヴドは漣を危険視するだろう。

だが、宝珠を多数所持しているとすれば迂闊には手を出せない。漣の戦力は以前よりも増しているのだ。

因みに、空也の愛称はすっかり太郎で定着した。半ば空也自身も諦め始め、反応を楽しんでいた漣には少し面白くない。

漣が懸念していた佐久間への言い訳は、意外とあっさり片付いた。肝心な部分は佐久間に聞かれていなかったため、空也を追って来たということにしたのだ。

空也は渋い顔をしていたが、居候の立場であることを理解していたのか、漣の言葉に同調してくれた。

平穏な日々が戻り、漣は充実した毎日を過ごしていた。

やがて、銭湯へ戻って来た漣を、佐久間達が出迎えた。

「どうだった？」

「デパートじゃなくて、違うものにするってさ」

不安げな、それでいて期待の交じった美咲の問いに、漣は笑みを浮かべて答えた。

周りの人達から感嘆の声が漏れる。

内心、漣はほくそ笑んでいた。何せ、新たな金づるを手に入れたのだ。商店街に影響のない建物にする代わりに、漣から盗撮ディスクを買う権利を渡したのである。逮捕された堀田よりも高い金での購入を約束してくれた。これで漣の設備の拡大もよりスムーズに行えそうだ。

相手が男でなければもつと交渉は長引いていただろう。

「さすがね、漣」

彩が言った。

以前よりも口調に刺々しさがなくなっている。もつとも、まだ美咲達と比べるとどこか上からものを見ているような態度ではあるが。

「ふふん」

得意気に漣は笑って見せた。

「で、皆、風呂には入ってく？」

「勿論！」

漣の問いに、美咲が元気良く答える。

空也に代わって番台に入り、漣は接客を始めた。佐久間と彩が少し離れた位置から漣を見つめていた。漣も気付いていたが、客に対応している間は何もできない。

やがて、客が全て脱衣所に入ってから、佐久間と彩が漣の前に立った。

漣と彩を交互に見て、佐久間は脱衣所に入っていく。彩とすれ違う瞬間、佐久間は彼女に何事か囁いたようだった。穏やかな佐久間とは対照的に彩の目が大きく見開かれる。

「何て言われたんだ？」

「……負けないわよ、って言われた」

疑問を口にする漣へ、彩は驚いたような慌てたような表情で答えた。

「何か勝負でもしてるの？」

「違うわよ」

「ま、佐久間さんには敵わないか」

「そんなことないわよ！」

「そう？」

からかうように笑う漣に、彩はむっとしたように口を尖らせる。

「ねえ、一つ聞いたかったんだけど」

「うん？」

彩が少し目つきを険しくして

「どうして、あんなへましたのよ！」

「あれ、まだ気付いてないの？」

やや驚いたような漣の返答に、彩が眉根を寄せる。

「俺が何の考えもなしに追放なんてされるわけないだろ？」

にっと、漣は歯を見せて笑う。

「え、じゃあ、まさか、最初から……？」

「この世界でのんびり暮らしたくってね」

愕然とする彩に微笑んで、漣は言った。

亡命者は本気で漣を頼ってきたが、彼を援助することで自分の立場が危うくなることぐらい漣にはすぐに判別できる。レグナに策略を提案するだけの知力を備えた漣ならば、自分が追放される可能性も十分に考えられる。

いや、漣は初めからレグナを抜けるつもりでいたのだ。だが、レグナはレーン・シユライヴという人材を欲していた。レーンの知略や人望を失くしたくなかったのである。

故に、レグナが漣を追放せざるをえないように全てを仕組んだ。

「そんな……」

「彩には話しておこうかとも思ったんだけど、時間がなくてね」

亡命の手助けを実行してから、漣が実際にレグナから追放されるまでの時間はかなり早かった。罪人扱いの漣を他者と接触させるわけにもいかなかったのだ。亡命によって敵との繋がりがあるかもしれないと推測されるようにしたのだから。

「空也は知ってたの？」

「ああ、確か結構前に聞いてたな」

彩の問いに、番台の脇に立っていた空也が答える。

「なんで、私には話してくれなかったの？」

「あー、話しておこうかとも思ったんだけどさ、いなかったじゃん、お前」

怒ったように睨み付けてくる彩に、漣は苦笑した。

当時、見習いから正式な騎士へ昇格するための試験を受けていた彩は、漣の下にはいなかったのである。対して、空也は冷遇されているが故に、非番になることが多く、漣とは様々な雑談をしていた。空也との雑談の中で、漣はレグナを出て第三の世界で暮らしたいと語ったことがあったのだ。

「好きなのに……！」

ぼつりと呟いた彩の言葉に、漣は微笑んだ。

「俺は彩も好きだよ」

「なっ……！！」

にっこりと微笑む漣に、彩の顔が真っ赤になる。

「で、本命はどっち？」

横から口を挟んだ空也に、漣は笑みを含んだ表情で告げた。

「どっちも好きだし、今は秘密ってことで」

漣の返答に、空也は苦笑した。

「バカ」

頬を膨らませ、彩はそう言い捨てると脱衣所へと入って行った。番台下のディスプレイに彩が映るのを見て、漣はにやりと笑う。最近になって、漣はようやく彩の服の脱ぎ方を完全に把握できた。

彼女の脱ぎ方に合わせてカメラの映像を切り替えていく。

一枚ずつ服を脱ぎ、肢体を露わにする彩を眺めて、漣は小さく溜め息を漏らした。

「今日もカメラの感度は良好、良い眺めだ。」

「お、いい尻」

番台の中、漣の背後に立った空也が小さく呟いた。視線の先には風呂上りで涼んでいる香澄の背中が映っていた。ほんのり汗ばんだ、火照った身体を冷ますように、脱衣所内の扇風機の前で風を浴びている。

「口に出すな」

釘を刺しつつ、漣は画面を切り替えた。

「ちっ、変えんなよ」

「記録はしてあるから、後でお前用に編集してやるって」

舌打ちする空也に、漣は言った。

「……お前、もしかして全部こうなるように仕組んだのか？」
不意に、空也がディスプレイを凝視しながら呟いた。

「さあね」

背後に立つ空也へ視線を向け、漣は笑った。

完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9303d/>

ファド ミラージュ・レーン

2009年4月24日23時03分発行